第2章

十勝の先史時代と川

先史時代の年表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

はじめに　遺跡はタイムカプセル ・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

1．旧石器時代（2万4千年以上前～1万2千年前ころ）

旧石器時代の自然や人の暮らし ・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

① 日高山脈に「氷河」があったころの暮らし ・・・・・・・・・・・ 76

② カッターナイフのような替え刃式石器…細石刃 ・・・・・・・・ 78

③ 島になっていく北海道と人々の暮らし ・・・・・・・・・・・・ 80

コラム　黒曜石石器の作り方 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

炭や花粉でわかる木の種類 ・・・・・・・・・・・・ 81

ひとつの遺跡にある長い歴史 ・・・・・・・・・・・ 82

十勝縄文の始まり？それとも… ・・・・・・・・・・ 83

2．縄文時代（1万2千年前ころ～2千5百年前ころ）

縄文時代の自然のようすと暮らし ・・・・・・・・・・・・・・・ 84

① およそ８千年前にあった集落 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

② 今より暖かかったころの暮らし ・・・・・・・・・・・・・・・ 94

③ 寒くなったころの「墓地」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96

コラム　土器づくり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88

火起こし ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

縄文時代の川漁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

縄文時代の墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98

縄文ファッション ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99

3．続縄文時代・擦文時代（2千5百年前ころ～12世紀ころ）

①「縄文の文化」は続く・続縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・ 100

②「さつもん」って何だろう？ ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102

③ 麦づくりも始まる擦文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104

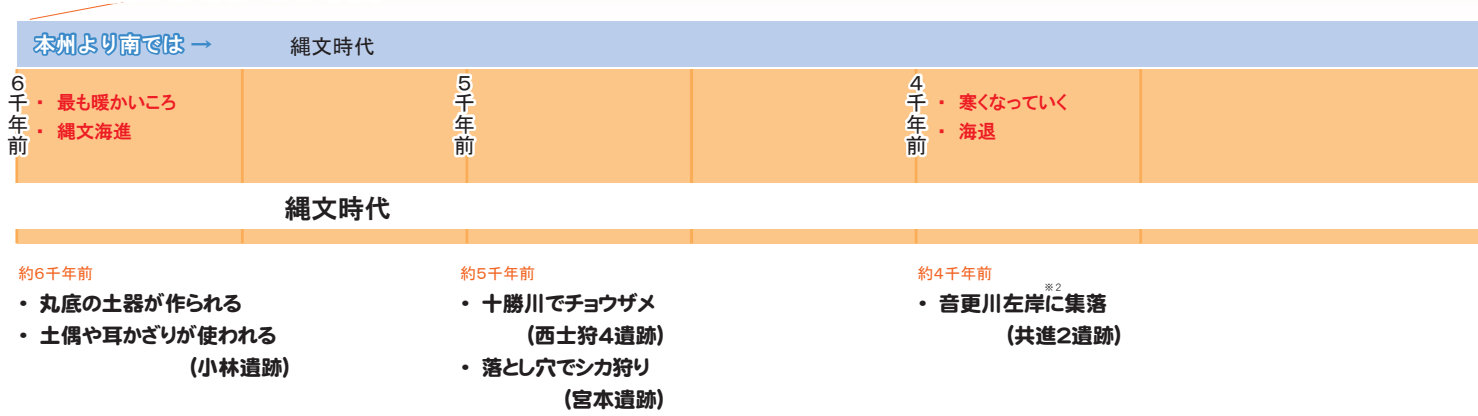
先史時代の年表

今のところ、十勝最古の遺跡は２万４千年前以前のものです。その後、最古の土器が出てくるまでに１万年以上の年月がかかっています。

12万年前から今までの年表

2万5千年前から今までの年表

6千年前から今までの年表



2,500年前ころ、本州以南では、鉄器と稲作が大陸から伝わり広がったことによって「弥生時代」に入っていきます。

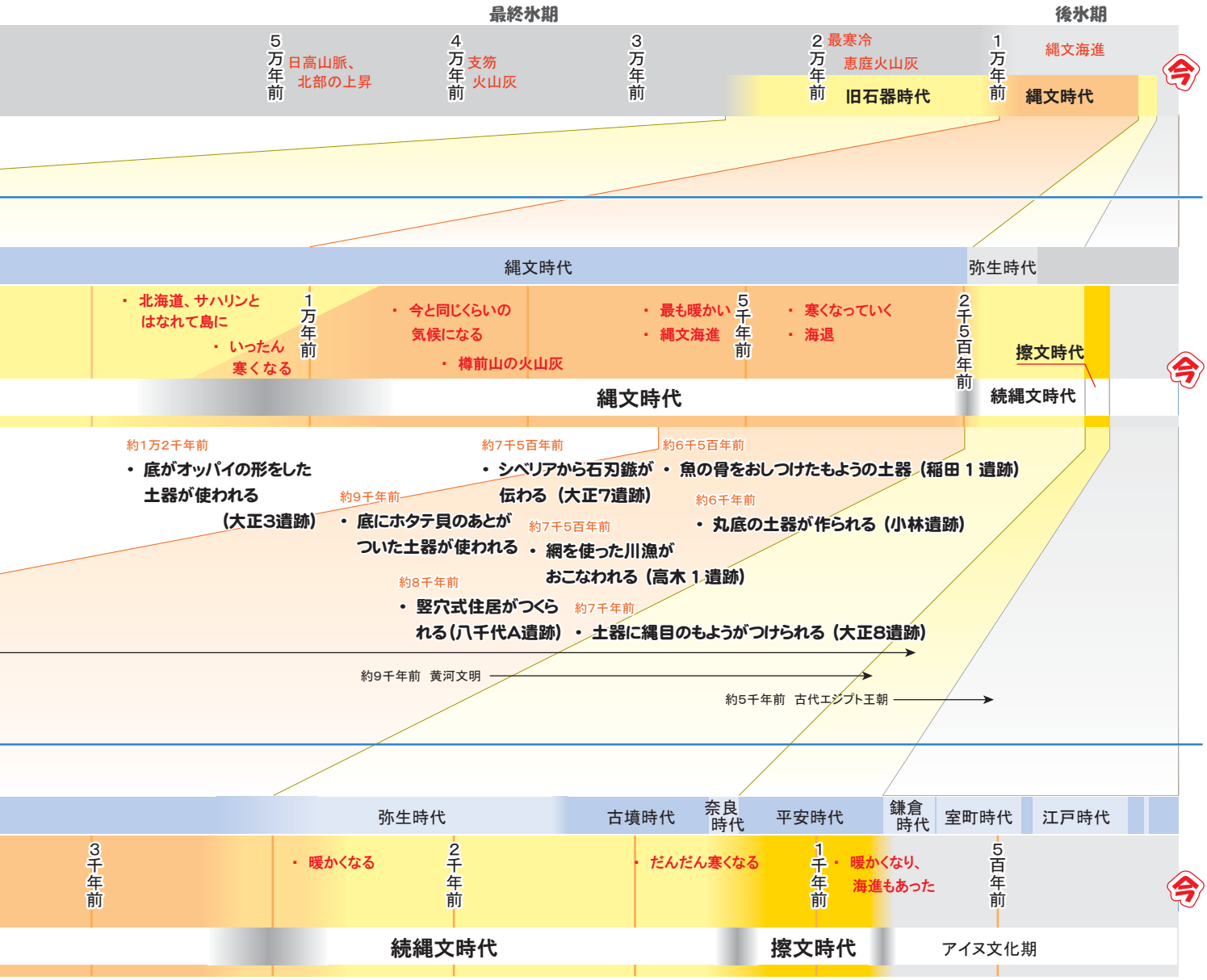
しかし北海道では、縄文時代の文化を受けつぎ、狩り・魚とり・木の実や山菜採り、といった、自然の中から食料を得ることを中心とした生活が続いていきます。

そのため、北海道の歴史については、いわゆる日本史とは異なった時代区分がなされています。

縄文時代に続く時代が、「続縄文時代（～およそ1,200年前）」、「擦文時代（～およそ800年前）」、「アイヌ文化期（明治に開拓が進むまで）」というように分けられているのです。

※１　忠類のナウマンゾウ（ちゅうるいのナウマンゾウ）：忠類ナウマンゾウの年代については、12万年前より少し古いという考え、あるいはひとつ前の間氷期（かんびょうき）であるミンデルーリス間氷期（約40万～20万年前）だという考えもある。

※２　左岸（さがん）：川の下流に向かって左側の岸のこと。右側が右岸（うがん）。



※3　副葬（ふくそう）：亡くなった人の亡きがらといっしょに、生きていたころの愛用品などを埋葬（まいそう）すること。
※4　栽培（さいばい）：穀物（こくもつ）や野菜、木、花などを植えて育てること。
※5　鍛冶（かじ）：鉄などの金属を熱してたたくことで、形を整えじょうぶにして（＝きたえて）、器具を作ること。

はじめに　遺跡はタイムカプセル … 大昔の暮らしを教えてくれる

● 遺跡って？

遺跡というのは、かつて人が生活していた場所のことです。

遺跡には、そこで使われたり作られていた道具、ほられた穴のあと、たき火のあとなどが残されています。これらを注意深く調べることで、いつごろ、どんな暮らしがおこなわれていたかがわかってくるのです。

ただ一ヵ所の遺跡だけでなく、近くの遺跡、はなれた遺跡、海外の遺跡などと比べることで、その時の暮らしがより くわしくわかっていき、どのように人や文化が移り、広がっていったかもわかってきます。

多くの遺跡は、かつてそこで暮らしていた人のあとを、土の中に包みこんでいます。いいかたを変えれば、大昔の人の「伝言」を土の中にねむらせ続けてきたものが遺跡です。

遺跡は「タイムカプセル」なのです。

● 遺跡を探す

遺跡の多くは土の中にあるものだといいました。それでは、どうやって見つけだすのでしょうか？

まず、大昔の人が好んでいた、水の便がよく、小高い場所に見当をつけます。川ぞいの高台（段丘など）が多いようです（右ページ）。そして、その場所の地面を注意深く見つめて、土器のかけらや石器が落ちていないかを探すのです。

遺跡を見つけるには勉強や経験が必要ですが、研究者の先生じゃなくても見つけることができます。

十勝でも多くの遺跡が、考古学の好きなふつうの人によって見つけられています。八千代遺跡（帯広市）は高校生が発見し、若葉の森遺跡・暁遺跡（帯広市）は中学生が発見しているのです。

また、とかち帯広空港周辺には旧石器時代の遺跡がいくつも見つかっていますが、これらは、魚釣りの好きなおじさんが、釣りに行く時に見つけたものです。

十勝では、千ヵ所以上の遺跡が確認されています。

もし遺跡を見つけたら、「いつ、どこで見つけたのか」を記録しておきましょう。そして、博物館や各市町村の教育委員会に連らくしましょう。

● 遺跡をほる（発掘）

遺跡は「文化財保護法」という法律で、「そのままの状態で未来に残すこと」と決められています。一度ほり出してしまうと、二度ともとの状態にもどせないからです。あとになって新しい技術ができて、「あれが残っていれば、すごいことがわかったのに…」とくやんでも、どうしようもないのです。

ですから、発掘調査（ほって調べること）は、研究のためにどうしても必要な時、あるいは、道路や建物をつくるために遺跡がこわされてしまう時にだけ、おこなわれます。

● しんちょうにおこなわれる発掘調査

発掘調査は、当然、しんちょうに、しんちょうにおこなわれます。

どんなものが、どの場所のどの深さで、どんな状態でどの地層に入っていたのか。

また、ものだけでなく、ものがあったあと（柱のあとなど）、ほった穴のあと（竪穴式住居やお墓など）、何かをしたあと（たき火のあとなど）も大切です。

これらを見落とさないように、あとから同じ遺跡をつくり直せるくらい正確に記録しながら、発掘調査はおこなわれるのです。

● 遺跡の年代を知る

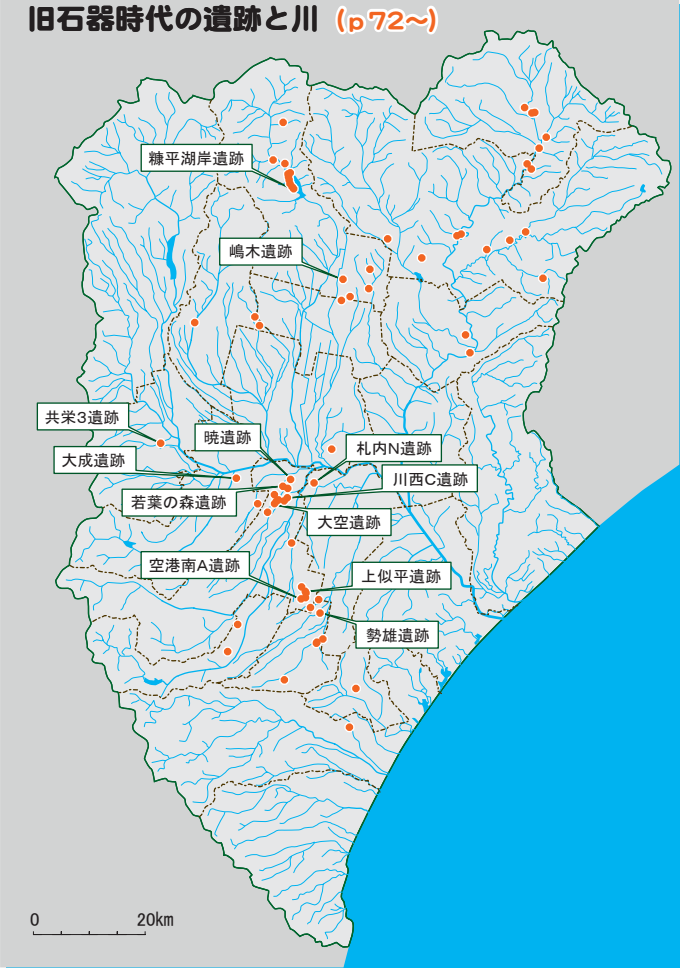
見つかった遺跡が、いつのものだったのかは、もの・地層・化学分析、によって調べます。

遺跡から見つかる「もの」やその特ちょうは、年代によってちがいがあります。例えば、土器が見つかれば、その遺跡は縄文時代からあとだということになります。そして、土器の形や文様（もよう）の特ちょう、石器の形や作り方などが見るポイントとなります。

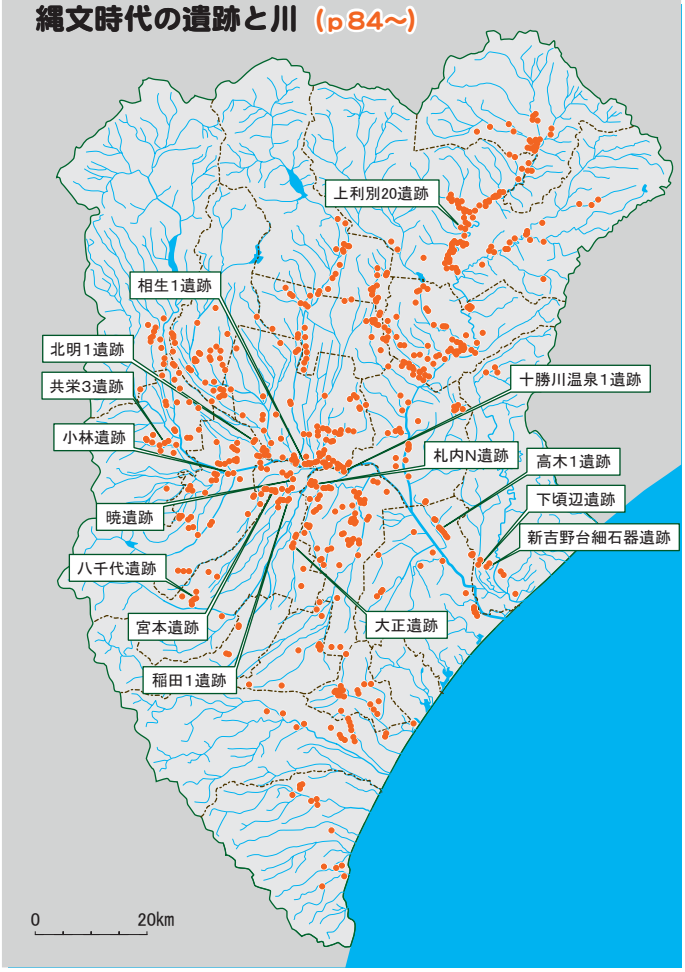
「地層」というのは、基本的に古いものほど下にあります（→p20）。どの地層から見つかったかによって、その古さがわかっていきます。また、広い範囲に降り積もり、ほかの地層と区別がつきやすい火山灰の地層は、年代を調べるいいめやすになります。（→p82）

「化学分析」をおこなうと、何年前のものなのかを数字で出すことができます。例えば^{14}C（放射性炭素）というものは、生き物が死ぬとある一定の割合で少なくなっていきます。これをいわば「砂時計の砂」がわりにして、いつごろ死んだのか（いつごろ生きていたのか）を調べるわけです。

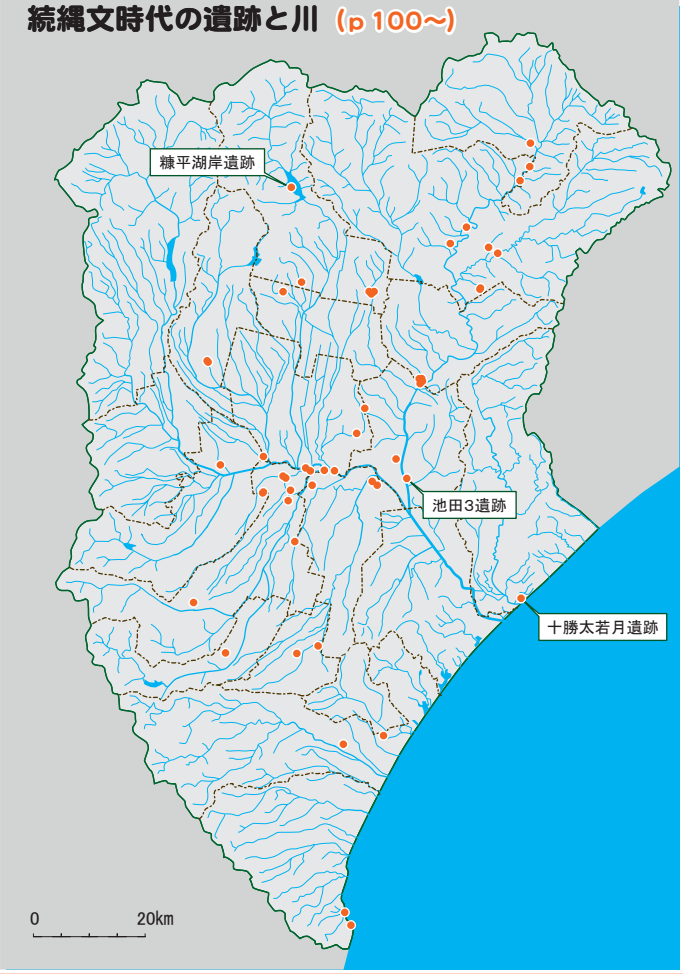
旧石器時代の遺跡と川 （p72～）



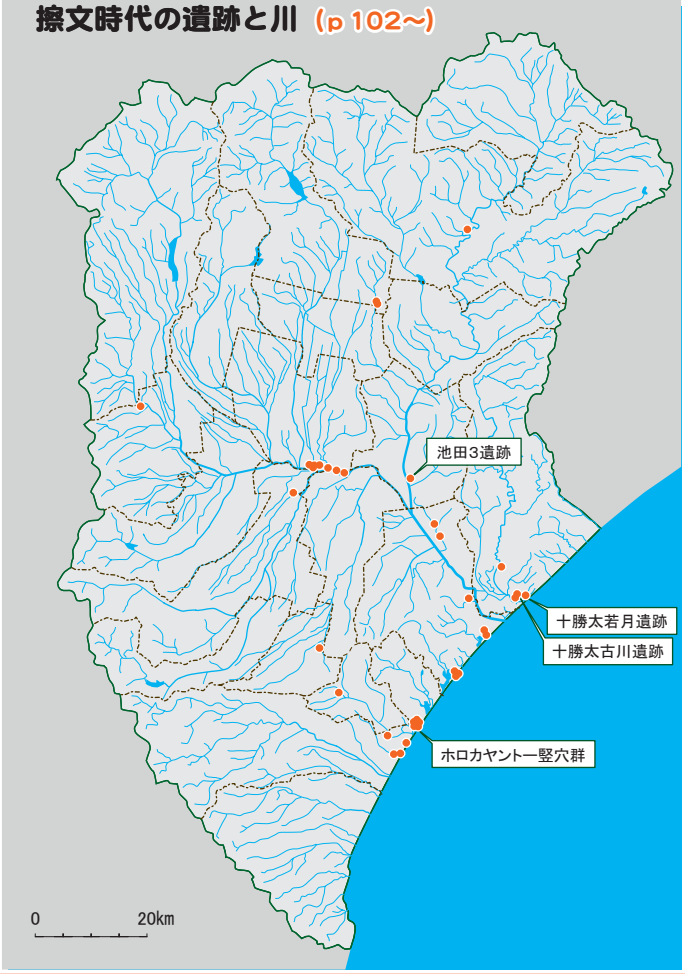
縄文時代の遺跡と川 （p84～）



続縄文時代の遺跡と川 （p100～）



擦文時代の遺跡と川 （p102～）



注：1つの遺跡からいろいろな時代の暮らしのあとが見つかることがよくあります。この図でも、同じ遺跡がちがう時代の図にのっています。なお、遺跡名は、この本で各時代の遺跡例としてあげたもののうちおもなものをのせています。また、川の流れは今のもので、各時代の時とは多少ちがっています。（帯広百年記念館埋蔵文化財センター資料より）

１. 旧石器時代

はじめに：旧石器時代の自然や人の暮らし

今のサハリン北部（ロシア）。約2万年前の十勝はこんなようすだったのだろう。　（写真：北澤 実氏）

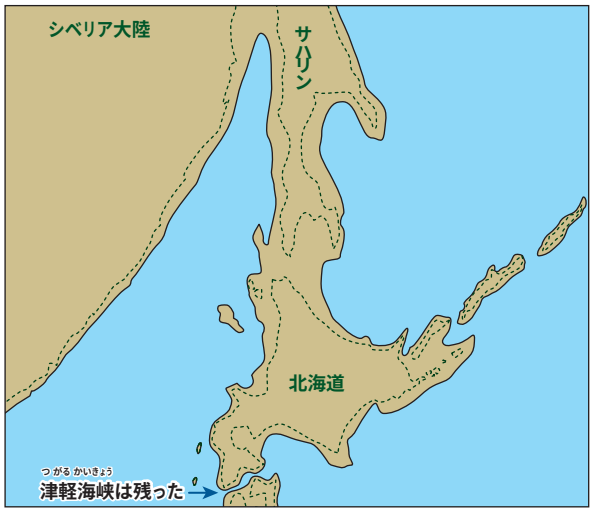
今から２万４千年前には、十勝で人が暮らしていました。「旧石器時代」にあたります。

旧石器時代とは、「石器（石を割るなどして作った道具）」を使い、一方で、「土器（粘土を焼いて作った器）」を使わない時代です。十勝の旧石器時代は、１万年以上続きます。

この時代は、「最終氷期※1（およそ８万年前から始まり１万年前ころに終わるとても寒い時期）」の最中でした。

とくに、寒さが最もきびしかったおよそ２万年前の十勝は、年平均気温が今よりも６～９℃くらい低かったといわれています。（→ｐ52）

このころの十勝平野は、グイマツ※2（カラマツの仲間）やハイマツ※3の林がまばらにある草原でした。（→ｐ62）



海面が下がり、北海道は大陸からのびる半島の先だった。
（『北海道の自然史』より、改変）

大陸とつながっていた北海道

氷期は、陸上の水が１年中こおっている「氷河」が広がる時期です。２万年前ころには、日高山脈にも氷河がありました（→ｐ52）。

また、水が陸上でたくさんこおって海に流れこむ量が減るため、海水が減り海水面が低くなります。海水面が低くなると、海底だったところが陸になります。

そのため、少なくともおよそ７万年前からおよそ１万２千年前までの間、北海道はサハリンと、さらにシベリア大陸と陸続きになっていました（→ｐ62）。

水量の少ない川

陸続きとなっていたシベリアから北海道へは、マンモスやバイソン※4（野牛）などがわたってきていました。

日高山脈には氷河がありましたが、平地には雪がほとんど降らず、山から流れ出す川は、氷河がとける夏の間しか水量がなかったといいます。

この季節には、海からのぼってきたサケやマスで川がいっぱいになりました。

写真はアメリカバイソン（おびひろ動物園）。約2万年前にはバイソンの仲間が北海道にもすんでいた。

※１　最終氷期（さいしゅうひょうき）：氷期とは、現在より寒い気候が続き中緯度（ちゅういど）の非山岳地帯（ひさんがくちたい）に氷床（ひょうしょう：５万km2以上の氷河）がある時期。氷期は過去に何度もあり、最近（約８万～１万年前）のものを最終氷期という。（→ｐ52）

※２　グイマツ：今では、北海道には生育しておらず、北緯50 °以北のサハリン、千島列島、シベリアに生育している。

シベリアから来た人々

旧石器時代に十勝で暮らしていた人たちは、陸続きのシベリアからやってきたと考えられています。彼らは、シベリアのあまりの寒さからにげるために、移ってきたようです。

人々は、石器や骨角器（動物の骨や角で作った道具）などを使って、いろいろな種類の動物をとって暮らしていました。マンモスをとることもあったかも知れません。

動物たちはエサを求めて移動します。人々も、動物の群れを追って移動しながら生活していました。

ひょっとすると、このようにマンモスを沼に追いこむ狩りをしていたのかも知れない。帯広百年記念館の大型模型。

移動する暮らしのため、家はテントのようなものだった。
（想像図：帯広百年記念館蔵）

「キャンプ」での生活

移動しながらの暮らしであったため、旧石器時代の家は持ち運びができて組み立てやすい、テントのようなものでした。いわば「キャンプ」生活だったのです。

キャンプ地としては、段丘のふちや古砂丘（→p60）の上といった、川が近くを流れる高台が選ばれました。

当時は川が重要な「道」でした（その後もずっと、今から百年くらい前まで：→p126、p175）。そして高台であれば、見晴らしがよく、えものである動物たちの動きがよくわかります。

また、こうした場所は水はけもよい場所であり、便利で快適な場所をキャンプ地として選んでいたのです。

大きな災害もあった

およそ１万８千年前のある日、十勝平野の中部から日高山脈の方を見上げた人がつぶやきました。

「何だ、あの黒い雲は」

黒い雲は空をおおい、やがて白っぽい砂が降り始め、あたりは、けむりが立ちこめたようになり、見通しが利かなくなりました（ここまでは空想です）。

支笏湖の北にある恵庭岳（千歳市）が大噴火を起こし、空高くふき上がった火山灰が西風（偏西風）に乗って、飛ばされてきたのでした（→p58）。

とくに寒く乾燥していた時期だったため、草木がなかなか生えません。芽室や帯広など十勝平野の中部には、数千年の間、砂漠が広がりました（→p58）。当時の人にとって、とても大きな「災害」でした。

帯広空港A遺跡（とかち帯広空港の南はし）で見られた約1万8千年前の恵庭火山灰。白っぽい中に黒いつぶ（鉱物）が混じるため「ごま塩」ともよばれる。

※３　ハイマツ：今では、北海道では、主におよそ1,000m以上の高山に生育している。ただし、条件によってはもっと標高の低い場所にも生育する場合がある。
※４　マンモスやバイソン：最終氷期には、マンモスやバイソン、ケサイ、トナカイ、オオツノシカ、ヘラジカなどがシベリア地方に生きていて「マンモス動物群」といわれる。北海道内で見つかっている最終氷期の化石には、マンモスとオオツノシカがある（→p62）。

旧石器時代の自然や人の暮らし

刃物に最適「十勝石」… 石器の材料「黒曜石」※1

十勝の石器の素材としては、「黒曜石」※1という石が最もよく使われます。いわゆる「十勝石」です。

この黒曜石は、火山活動でできたガラス質の石です（→ p 33）。割ってできるうすい破へんがとてもするどく、加工もしやすいため、刃物を作るのにとても便利です。

ただ、どこにでもあるわけではなく、十勝では十勝三股周辺（上士幌町）がおもな産地です。そこから川で運ばれるため、音更川・士幌川・居辺川・芽登川・美里別川などでは、河原の石として手に入れることもできます。

また、白滝（遠軽町）や置戸、赤井川の黒曜石で作られた石器が十勝で使われ、十勝産黒曜石の石器が道南の知内町にまで伝わっていました。旧石器時代にも、十勝と北海道内各地との間に広く交流があったのです。

この黒曜石の石器は、旧石器時代に続く「縄文時代」や「続縄文時代」にも作られ、使われ続けます。

（→ 縄文時代 p 84、→ 続縄文時代 p 100）

● 北海道内のおもな黒曜石産地。

黒曜石（十勝石）。

割った黒曜石。

石器にも「技術革新」がある … 3つに分かれる十勝の旧石器時代

十勝の旧石器時代は、使われる石器の種類によって、おおよそ３つに分けることができます。

まず、２万年前より前の、形が整っていない小型の石器が作られていた、最も古い時期（→ p 76）。

それから、およそ２万年前以降の「細石刃」という石器がたくさん作られる時期。細石刃は、はばが数mm～１cmくらい、長さが数cmのカッターナイフの刃のような形をしています。骨や木のじくに何個もうめこんで、ヤリ先などに使います（→ p 78）。

その次が１万３千年前ころよりあと、細石刃が作られなくなり、一方で、「有舌尖頭器（→ p 80）」というヤリ先の石器などが使われるようになる時期です。

旧石器時代の中でも、だんだんと効率的に、また目的に合った石器を作る技術が生み出されているのです。その技術がよその場所に伝えられて広がり、さらに工夫されて新しい技術が生まれる…　というように、「技術革新」と「情報伝達」がくり返されていきました。

形が整っていない剥片石器※2
（２万４千年以上前）

細石刃という、小さな石器
（約１万６千年前）

有舌尖頭器という、ヤリ先の石器
（約１万３千年前）

旧石器時代の石器は、時期によって変わっていく。

（石器・左右の写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※3）

※１　黒曜石（こくようせき）：黒曜石の産地は、全国では大小約 260 ヵ所ある（『十勝の黒曜石』より）。蛍光Ｘ線分析（けいこうエックスせんぶんせき）という方法で、産地を推定することができる。

※２　剥片（はくへん）：はがして作ったかけら。

※３　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話　0155-41-8731　日・月曜日休館

黒曜石石器の作り方 … 力だけではうまくできない

● きけんなので注意

黒曜石は「火山ガラス※4（→p33）」のひとつで、割ったかけらのふちがするどく、とてもよく切れる刃物になります。油断するとかんたんに手や指を切ってしまいます。

また、飛びちる破へんが細かい上にこれもするどいので、目に入ると大変です。石器作りは、注意しておこないましょう。

黒曜石を割る時は、長そで・長ズボンにぼうしをかぶり、手には革手ぶくろ、目には保護メガネ（草かり用のゴーグルなど）をつけた方が安全に作業できます。マスクや作業用エプロンをつけると、より安全です。

石器作りのようす。あぶないので真剣に。右写真のように革手ぶくろやゴーグルをつけるとより安全にできる。

（左写真：北澤実氏、　右写真：（財）十勝エコロジーパーク財団）

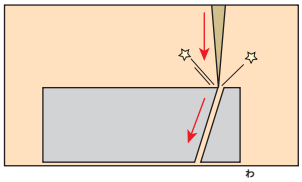
● できれば「シカの角」※5を用意

手ごろな石やかなづちをハンマーにして割ってもいいのですが、シカなどの角※5や骨の方が、たたいた力がゆるやかにおくまでとどくので、長い剥片※2（かけら）ができます。

シカ角のハンマーなどの道具で石器作り。右はシカの角。

● 力はななめに伝わる

石に伝わった力はななめに伝わります。ですから、入れたい割れ目に対して、ななめに力をあたえます。



まっすぐたたくと、ななめに割れる。

● 石を分割する・かけらを作る・形を整える

石器の作り方には、段階によっていくつかの方法があります。

まず、大きな原石は分割します。地面のもっと大きな石の上に置き、別の石を使って割ります。

続いて、分割したものから「かけら」を作ります。手で持ったり足でおさえたりして、石や角などの「ハンマー」でたたきます。角などをあてて別のハンマーでたたくと、正確に力を伝えられます。

さらに細かくていねいに細工するときには、角などをおしつけてこじり、はがすようにします。

石器作り。① 大きな原石を分割。② ハンマーでたたいたり、③ あててたたいて、かけらを作る。④ こじって細工する。

（参考『日本人はるかな旅展のウェブページ』、改変）

● 肉を切ってみる

石器ができたら、肉を切ってみましょう。石器が思いどおりの形にできていなくても、その切れ味はおどろくほどです。

ただし、細かい破へんがついていると切った肉を食べられなくなってしまうので、よく落としてから使いましょう。

くどいようですが、油断すると、かなりのケガをします。緊張して使ってください。

石器で肉を切る。

※4　火山ガラス（かざんガラス）：マグマが地上に出て急激に冷やされることなどによって、鉱物（こうぶつ）の結晶（けっしょう）を作らずに固まったものを火山ガラスという。

※5　シカの角（シカのつの）：中でも春先に自然に落ちた「落角（らっかく・おちづの）」が固いのでハンマーとして向いている。

① 日高山脈に「氷河」があったころの暮らし

発掘中の若葉の森遺跡（帯広市）とそのむこうに見える帯広市街地。かつては、この市街地のあるところが、十勝川の氾濫原だった。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※2）

２万４千年以上前、今の若葉小学校（帯広市）の南にある丘の上で、人が暮らしていました（若葉の森遺跡）。

当時のがけの下には、十勝川に流れこむ小川が流れていました。ここから、ずっと北の芽室町西士狩のあたりまで、大小の川が流れる平地（氾濫原：→p46）でした。川の水量は少なかったようですが、たまにある大洪水では、がけの下まで「湖」のように水がたまりました。

今よりずっと寒いころ（氷期）で、日高山脈には氷河がありました（→p52）。

きびしい自然の中、当時の人はヤリを持って動物の群れを追いながら、たくましく生きていました。

石器の材料である黒曜石は、十勝川をわたって音更川下流の河原でひろってきました。

ベースキャンプ

旧石器時代の暮らしは、キャンプ生活です。キャンプの中には、比較的長くとどまって狩りの準備をする「ベースキャンプ」があります。

およそ２万１千年前、稲田小学校（帯広市）の南側は、このベースキャンプだったようです（川西Ｃ遺跡：→p82）。

ここには、「石刃」という細長くてうすい石器がたくさん持ちこまれ、これを加工して新たな石器が作られていました。大きな石（最大３kg）のかたほうに刃を作った「礫器」も作られています。（→ 石刃写真 p92）

そのほか、赤や黒の「顔料（絵の具）」が使われ、たき火もおこなわれていました。

（上）川西Ｃ遺跡（帯広市）での発掘（平成9年）。右後ろは稲田小。

川西Ｃ遺跡で見つかった礫器（左）と顔料のもと（右）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

丘の上で石むし料理

芽室高校がある丘のへり（大成遺跡：芽室町）や、とかち帯広空港近くの上似平（上似平遺跡：帯広市）では、およそ２万年前に「石むし料理」がおこなわれていました。

上似平遺跡の石むし料理のあと。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

石むし料理は、食材を葉っぱなどで包み、焼いた石（焼き石※1）を使って熱する調理法です。

焼き石を使うと、じっくり時間をかけて熱を伝えることができます。食材の中まで火を通すことができる、とてもすぐれたやり方です。

石むし料理。石の上で火をたき、火を消したあと上に葉っぱをしいて食材をのせ、さらに葉っぱや土（ここではブルーシート）をかぶせる。

（写真①～④：平成16年の『水がきジャンボリー』）

※1　焼き石（やきいし）：焼き石は熱をゆっくりと放つので、現在でも料理に利用される。焼き石による石焼きイモは、ベータアミラーゼが活発に働く温度を保つことによって、独特な甘みを出すことができる。韓国料理の石焼きビビンバは、どんぶりが焼き石となっている。新潟県の佐渡（さど）ではアユの石焼きが名物料理となっており、同じく新潟県の粟島（あわじま）では、「わっぱ」とよばれる木製のおけに水と具を入れ、そこに焼き石を入れて煮立たせる「わっぱ煮」という名物料理がある。

十勝で最も古い遺跡 … 若葉の森遺跡

「若葉の森遺跡」は、今（平成19年）のところ、十勝で（そして北海道で）最も古い遺跡で、２万４千年前より古いことがわかっています。

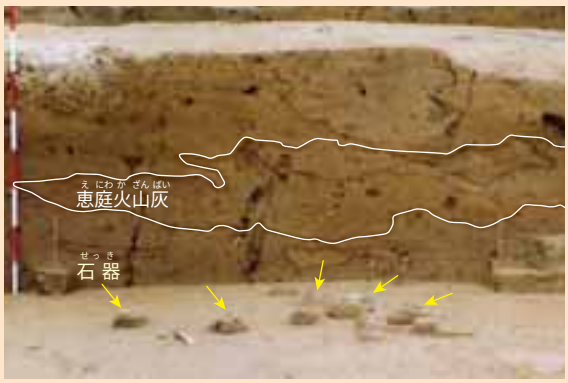
若葉の森遺跡の発掘で見つかった石器は、帯広市の「帯広百年記念館埋蔵文化財センター[※2]（西23条南４丁目）」で見ることができます。

まだ、発掘されず地下にねむっている部分も広く残っています。

このほか、およそ２万年前の古い遺跡としては、嶋木遺跡（上士幌町）や共栄３遺跡（清水町）、勢雄遺跡（更別村）などがあります。

これら古い遺跡は、およそ１万８千年前に降った恵庭岳の火山灰（→p58）より、下の地層から見つかっています。

若葉の森遺跡（帯広市）の発掘。平成14年（2002）。
（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）



若葉の森遺跡の地層。恵庭火山灰（白線内）の下から石器が見つかった（矢印）。
（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

若葉の森遺跡の位置。帯広市西17条南６丁目。

見つかった石器を組み合わせると … 観察のポイント

石器作りのようす（再現）。

バラバラの石器を組み上げる。左上が組み上がった形。
（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

バラバラの石器を復元する

遺跡では石器が見つかると、その位置やようすを細かく記録します。そして、石の「顔つき」を見ながら、パズルのように組み立てていきます。すると、どのように割って作られたのか、どんな大きさの石を使ったのか、どのくらい広がっていたのか、といったことがわかってくるのです。

大きさは９cmくらいの石

組み上がった石は、大きくてもおとなのにぎりこぶしくらいでした。河原にはもっと大きな石もあるのですが、これくらいの石がよく使われています。この石を、パカッと半分に割ったあと、ひたすらたたいて割っていたようです。

ないところが大切

組み合わせても、完全に一個の石にはならず、ところどころ、ぬけていました。ひたすらたたいて割ったあと、いいところを取り出して使ったのでしょう。

※２　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話　0155-41-8731　日・月曜日休館

② カッターナイフのような替え刃式石器 … 細石刃※1

（上）暁遺跡（帯広市）で見つかった「細石刃」の一部。
（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

（右）細石刃は、木や骨などのじくにはめこんで、ヤリ先やナイフに使った。
（帯広百年記念館：※3）

とくに寒くなる２万年前ころになると、知らない人にとってはただの石のかけらか、黒いガラスのかけらのような、小さな石器が作られるようになりました。

はばが数mm～１cmくらい、長さが数cmで、カッターナイフの刃のような形をしています。

この石器は「細石刃」※1とよばれています。

細石刃は、角や骨で作られたじくに、いくつもうめこむことで、ヤリの先や、ナイフとして使われました。

もし、どれかの細石刃が欠けたりこわれたりしても、そこだけを替え刃のようにつけかえることができる、すぐれものでした。

細石刃は、日本列島・シベリア・モンゴル・中国北部・カムチャツカ半島など、東アジアの広い範囲で使われました（大陸では３万年以上前から）。

約1万6千年前の暁遺跡（帯広市）の想像図。右おくが十勝川。
（想像図：帯広百年記念館蔵）

川ぞいの高台で作られた細石刃

およそ１万６千年前、今の帯広市西８条南12丁目、聖公会幼稚園周辺の高台※2では、細石刃がさかんに作られていました（暁遺跡）。

この高台と鈴蘭公園（音更町）の高台の間は、当時、十勝川の氾濫原でした。十勝川とその支流が、曲がりくねり何本にも枝分かれをして流れていたのです。

暁遺跡のすぐ下にも、十勝川の支流が流れていました。

（→ 氾濫原 p46）

材料には白滝の黒曜石がよく使われた

細石刃を作るためには、黒曜石の中でも、とくに質の良いものが使われていました。

大型で、ていねいな加工をするものは、白滝（遠軽町）産の黒曜石から作られました。ほかの石器には、十勝三股（上士幌町）産や置戸産の黒曜石も使われていました。（→ 十勝三股の黒曜石 p33）

白滝は十勝から見て北にあり、暁遺跡から直線距離で 100 km以上あります。途中に、石狩山地もあります。

当時はもちろん、今のような道路はなく、基本的には川や川ぞいを「道」として使っていました。

また、上士幌町の旧石器時代の遺跡からも、白滝産の黒曜石でできた石器が見つかっています。地図を広げて、どんなルートを使っていたか考えてみましょう。

白滝（遠軽町）にある黒曜石の巨大な岩。白滝は、暁遺跡（帯広市）から北へ100km以上行ったところにある。
（写真：北澤 実 氏）

※1　細石刃（さいせきじん）：細石刃文化は、大陸から日本列島に伝わった。伝わるルートとしては、当時大陸と陸続きだったサハリン・北海道から津軽海峡をこえて本州に伝わるルートと、朝鮮半島から海をわたって九州や本州（四国をふくめて一つの島）に伝わるルートとがある。千歳市柏台Ⅰ遺跡では恵庭火山灰よりの下の地層で、細石刃石器群が確認された。たき火のあとの炭素で測定したところ、約２万年前の、国内最古の細石刃石器群であることがわかった。

細石刃を作る「工場」… 帯広市の「暁遺跡」

「暁遺跡」（帯広市西８・９条南 12・13 丁目）では、旧石器時代の遺跡と縄文時代の遺跡（→ｐ90）が見つかっています。

遺跡の東部分が、およそ１万６千年前の旧石器時代の遺跡で、細石刃が8,000点以上、細石刃核（下参照）が50点見つかり、ほかにも削器（切ったりけずったりするための道具）や彫器（彫刻刀のような刃をもつ道具）など、多くの石器が出てきました。

これほどの細石刃が見つかったということから、この場所は、細石刃を作るための場所、いわば「工場」だったと考えられています。

暁遺跡の石器は、帯広百年記念館などで見ることができます。

旧石器時代だけでなく、縄文時代の遺跡も見つかっているということは、この場所が時をこえて「いい場所」だということなのかも知れません。

細石刃が見つかっている遺跡としては、上士幌町の糠平湖岸遺跡、帯広市の南町２遺跡・上似平遺跡・空港南Ａ遺跡などがあります。

暁遺跡（帯広市）の発掘。昭和59年（1984）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

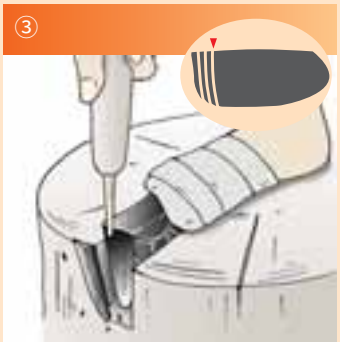
暁遺跡の位置。
帯広市西8・9条南12・13丁目。

暁遺跡のある高台。約1万6千年前に段丘となった「上札内Ⅱｂ面」（※2）（→p54）。

細石刃の作り方 … 観察のポイント

石のかたまりを打ち欠いて整形する。

長い平らな面を作る（細石刃核）。



平らな面に角や骨をおし当て、細石刃をはぎ取る。

できた細石刃は、骨や角でできたじくに、いくつもうめこんで使う。

（『120年より前の帯広』『十勝川の川舟文化史 澪標』より、改変）

細石刃の作り方は、次の通りです（→ 石器の作り方ｐ75）。

① 石のかたまりを打ち欠き、形を整える
② かたほうの長いふちを打ちぬいて、平らな面をつくる
③ 角や骨を平らな面におし当てて、細石刃をはぎとる

石器を作るとき、作りやすく形を整えた石を「石核」といい、①や②の作業でできる、細石刃を作るための石核は「細石刃核」といいます。

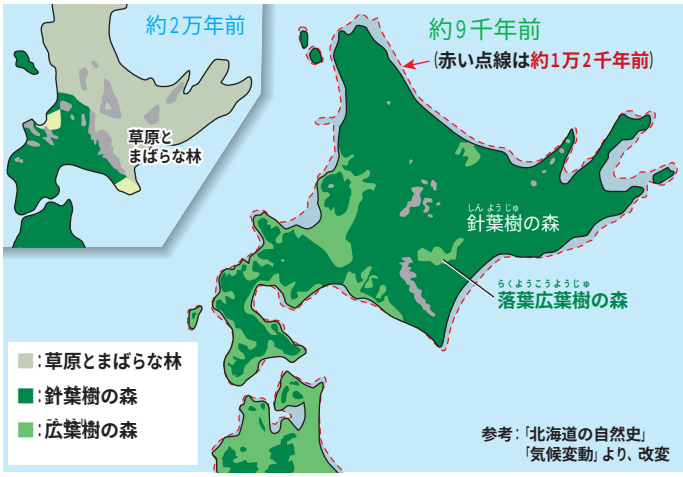
ハンターたちは、②でできた細石刃核を持ち運び、狩りで細石刃がこわれると、その場で作って取りかえたようです。

細石刃核。ハンターたちはこれを持ち運んで石器を作った。（帯広百年記念館：※3）

※２　聖公会幼稚園のある高台（せいこうかいようちえんのあるたかだい）：この場所に段差ができ高台（段丘面：上札内Ⅱｂ面）となったのは、約１万６千年前のこと（→ｐ54）。若葉の森遺跡や川西Ｃ遺跡に人がいた２万年以上前には高台ではなく、ここも十勝川の氾濫原（はんらんげん）だった。

※３　帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘２番地　電話 0155-24-5352　月曜日休館

③ 島になっていく北海道と人々の暮らし



約1万2千年前になると、北海道はサハリンと分かれ島になった。暖かくなるにつれ、十勝にも針葉樹（トドマツなど）の森が広がっていった。約9千年前になると、落葉広葉樹（ミズナラなど）の森も広がりはじめた（→ 縄文時代 p84）。

最も寒さがきびしかった1万8千年前ころを過ぎると、地球は暖かくなってきていました。ただし、スムーズに暖かくなったわけではなく、何度も寒さがぶり返しました。

暖かくなるにつれ、日高山脈をはじめ、地球上の氷河がとけ出しました。とけた水が海に流れこみ、海面が高くなり、低い土地が海底にしずんでいきます。

およそ1万2千年前には、北海道とサハリンが海によって切りはなされ、北海道は島になりました。（→ p64）

また、暖かくなるにつれ、だんだんと森林が広がっていきました。トドマツやエゾマツの仲間など針葉樹※1の森です。

針葉樹の林（東ヌプカウシヌプリ：鹿追町）。ただし、とても若い林。

消えていく「細石刃」

一方では、マンモスやバイソン（野牛：→p72）など、北からやって来た大型の動物が減っていきました。

替え刃式の石器「細石刃（→p78）」も、それに合わせるようにして作られなくなっていきます。

細石刃は、角などのじくにうめこんで使うため、あまり小さなヤリ先が作れません。大型の動物がいなくなり、小さくすばしっこい動物を相手にするためには、使いにくくなったのかも知れません。

細石刃。

つなぎやすいヤリの先「有舌尖頭器」

1万4千年前ころから、「有舌尖頭器」というヤリ先の石器が作られるようになりました。木製の柄につなぐところが細工してあって、石器の下が飛び出した形（突起）になっています。

この突起が「あっかんベェ」をしたときの「舌」のように見えることから、「有舌尖頭器（舌のような突起が有る尖った頭の石器、という意味）」と名づけられています。

また、刃をみがいて（といで）作った「石おの」も使われるようになります。森林が広がったことで、木々を切り開く必要が大きくなったためでしょうか。

石おの（札内N遺跡）。

札内N遺跡（幕別町）で見つかった有舌尖頭器。それぞれの石器の下に飛び出したところ（赤丸の部分など）が「舌」。有舌尖頭器はヤリ先として使われた。

（写真：2枚とも幕別町教育委員会蔵）

※1　針葉樹（しんようじゅ）：葉が針のように細長いマツやスギなどの樹木のこと。温帯北部から冷帯を中心に分布している。分類としては裸子植物門・球果植物綱に入る。

移り変わっていく旧石器の文化 … 大空遺跡から札内N遺跡へ

およそ１万６千年前の「暁遺跡（帯広市）」からは、細石刃核（細石刃をけずり出す前の石器）は見つかりましたが、有舌尖頭器は見つかりませんでした（→ｐ79）。

それよりあとの「大空遺跡（帯広市）」からは、細石刃核と、有舌尖頭器がいっしょに見つかりました。

およそ１万３千年前の「札内N遺跡（幕別町字依田）」では、大小の有舌尖頭器はありましたが、細石刃は見つかっていません。

細石刃を使う文化から、有舌尖頭器を使う文化へ移る間に、両方とも使う文化があったようです。

大空遺跡の旧石器は帯広百年記念館で、また札内N遺跡の旧石器は幕別町ふるさと館で見ることができます。

大空遺跡（帯広市）では、細石刃核（左）と有舌尖頭器（右）がいっしょに見つかった。（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※2）

大空遺跡（帯広市空港南町南10線・南の森西）と帯広百年記念館（帯広市緑ヶ丘2番地）の位置。

札内N遺跡の位置。幕別町字依田。

幕別町ふるさと館の位置。幕別町字依田384（依田公園横）。

炭や花粉でわかる木の種類 … 昔の環境を知るために

木の種類によって、寒いところに生えるものもあれば、暖かいところに生えるものもあります。昔生えていた木の種類がわかれば、そのころの気候がわかります。

それでは、昔生えていた木の種類はどうやってわかるのでしょうか。

答えは、たき火のあとと花粉の化石です。

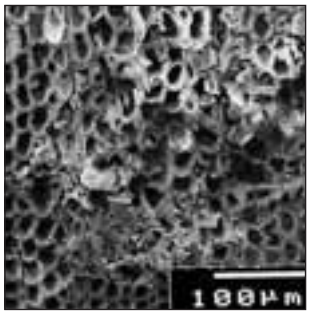
木もふくめて、ほとんどの生き物は死ぬとくさって（分解されて）土にかえります。

ところが、たき火に使われて炭になったものは、くさらずに残ります。およそ２万年以上前の若葉の森遺跡や南町２遺跡（帯広市）からは、ハイマツ（→ｐ62）やグイマツ、トドマツの仲間やエゾマツの仲間の炭が見つかっているため、このころがとても寒かったことがわかります。

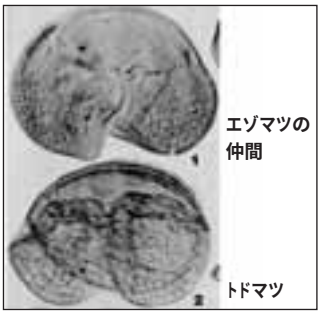
また、多くの花粉は、中身がくさっても外側の膜がとてもくさりにくいので、長い間（数千万年も）残り化石となります。この膜の形を調べることで、どんな種類の植物が生えていたかがわかります。（→ 化石 ｐ21）

とくにしめったところでは、ものがくさりにくくなります。そこで、湿原の土である泥炭に長いつつをねじこんで、土ごとそのつつをひきあげる「ボーリング調査」をすると、上から新しい順番に昔の花粉を見つけることができます。

それによって、その湿原周辺の昔の自然環境が、順々にわかっていくのです。



若葉の森遺跡（帯広市）で見つかったエゾマツ類の炭。（※3）



暁遺跡（帯広市）で見つかった花粉。（350倍）

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

※２　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26－８　電話 0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

※３　μm（マイクロメートル）：長さの単位で、１㎜の千分の１。

ひとつの遺跡にある長い歴史 … 川西Ｃ遺跡の場合

川西Ｃ遺跡の位置。帯広市西15条南40丁目。

川西Ｃ遺跡は、帯広市西15条南40丁目、稲田小学校の周りにある遺跡です。

この場所は、およそ４万５千年前から札内川がけずり残していった段丘の上です（→ｐ54）。すぐ北側では、八千代（帯広市）から流れてきた売買川が段丘の角をけずり落とすように流れ落ち、札内川に向かっています。

この遺跡では、76 ページにあるように、およそ２万１千年前の石器や顔料のもとなどが見つかっています。旧石器時代のキャンプ生活の中でも、どちらかというと長くとどまって、狩りの準備などをする「ベースキャンプ」だったと考えられています。（↙）

川西Ｃ遺跡の発掘調査。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※1）

しかし、ここを人が利用したのは、その時だけではありません。

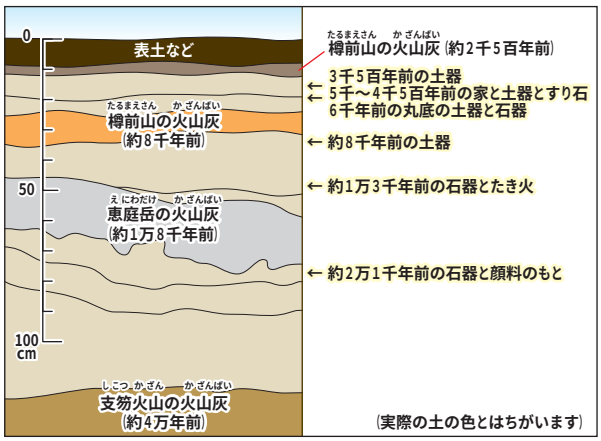
およそ１万３千年前、まだ氷期（→ｐ52）ではありますが少しずつ暖かくなってきたころ、ここに再び人がやって来て石器を作り、たき火をしていました。

続いて、およそ８千年前、今とほとんど同じ暖かさになったころ、今度は土器を使う人々がここで暮らしていました。すでに縄文の文化（→ｐ84）になっていました。

縄文時代のものとしては、ほかにもおよそ６千５百年前の土器が大量に見つかり、さらに６千年前の丸底の土器と石器、５千～４千５百年前の小さな住居あとと土器やすり石、３千５百年前の土器が見つかっています。最も古い時からすでに１万７千年（以上）たっていたころです。さらに、共栄通をはさんで西側にも「稲田１遺跡」があり、ここでも旧石器時代と縄文時代の遺跡が見つかっています（→ｐ92）。

いい方を変えれば、稲田小学校のあたりは、１万７千年の時をこえて、たびたび人がやって来ていた場所なのです。川西Ｃ遺跡だけでなく、多くの遺跡が同じようにたびたび使われています。

ただし、ずっと絶え間なく人がいたわけではありません。ある時期人がいなくなって、数百年たってから、別の文化を持った集団がやって来る、ということがくり返されているのです。



川西Ｃ遺跡の地層イメージと見つかったものの年代。

それよりあとはどうでしょうか。縄文時代に続く続縄文時代（→ｐ100）や擦文時代（→ｐ102）、開拓前のアイヌ文化期においては、狩りや植物採集などをするための生活空間（イオル → ｐ150）として利用されたでしょうし、あるいは集落がつくられたことがあったかも知れませんが、その遺跡は残っていません。

それではおよそ３千５百年前を最後に、人が住みついた証拠はないのでしょうか？　いえいえ、その３千５百年後、また多くの人がもっと広い範囲に広がって住みついています。たくさんの人が集まる巨大な建物も建てられました。

そう、今の住宅地と稲田小学校です。

●：川西Ｃ遺跡に人がいたことがわかっている時。くり返し人がやってきている。

※1　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話　0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

十勝縄文の始まり？ それとも…　大正３遺跡

発掘中の大正３遺跡。ここを流れていた川が、流れにそってつくった「もり上がり（自然堤防：※2）」の上にあった。今は自動車道の下。

発掘調査の時、土器のかけらが、ふつう縄文のものが出る地層より下の地層から見つかりました。

調査をしていた山原学芸員（帯広百年記念館埋蔵文化財センター）は、これを見ると、「この文様（もよう）は、新潟県の小瀬ヶ沢洞窟遺跡のものと似ている」と思ったそうです。小瀬ヶ沢の土器は、縄文時代の始まりころ（草創期）のものでした。

この土器のかけらには、ほかにも表面をつめや道具でさしたりつまんだりしてつけたもようがあるなど、縄文時代初めの特ちょうを持った土器であることが確かめられました。

大正３遺跡で見つかった石器。左上がヤジリ（矢の先）。左下円内はその後の縄文時代のヤジリ。

（上）自動車道完成後。

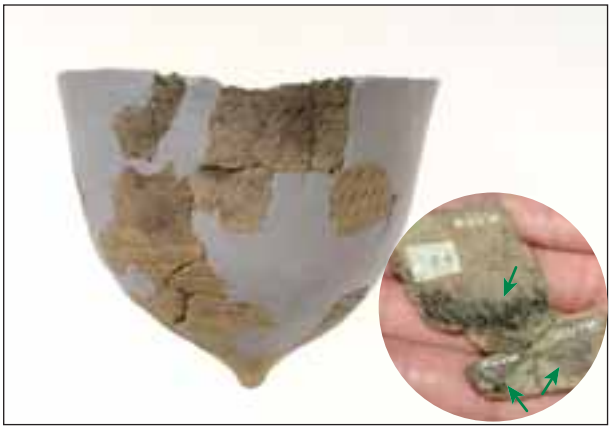
（右）大正３遺跡の位置。帯広市大正町東３線。

「土器」は、粘土を形にし火で焼いて作る器です。土器が現れることで、「縄文の文化」が始まります。

本州では、およそ１万３千年前の土器が見つかっていて、ここから「縄文時代」が始まるとされていますが、北海道ではずっとおくれて、９千年前ころから土器が使われだしたと考えられていました。

しかし、平成 15 年（2004）、帯広・広尾自動車道の工事前に発掘調査された「大正３遺跡（帯広市大正町）」から、およそ１万２千年前の土器が見つかりました。

まさに、北海道の歴史を書きかえる、大発見だったのです。



復元された土器。円内は土器についていた「おこげ」（矢印）。

さらに、見つかった土器は料理に使われたようで、「おこげ」がついていました。おこげにある「炭素」を調べることで、いつの時代のものかわかります。

その結果、「おこげ」は１万２千年くらい前のものだったことがわかったのです。（→ｐ70）

こうして、大正３遺跡から見つかった土器は、北海道最古のもので、本州で縄文時代が始まってまもなくのものであると確かめられました。

ただ、これが十勝（そして北海道）の縄文時代の始まりだとすると、なぞも残ります。

このあと、約３千年の間、土器が見つかっていないこと。３千年後の縄文の土器や石器と、ちがいが大きいこと。ヤジリ（矢の先）の石器も見つかっているが、本州のもの（▲）とちがって、◆形であること、など、わからないことが多いのです。

一度、暖かくなった時に、土器を持った人たちが北海道にわたってきたのだけれど、およそ１万２千年前にあった「寒のもどり（寒さがもどった時期）」に、いなくなったのかも知れません。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

※２　自然堤防（しぜんていぼう）：自然なままの川にそってできる周りより少し高い土地。洪水が起きた時、あふれた川の水が土砂を堆積（たいせき：積み重ねること）していくことでできる。※１　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話　0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

２. 縄文時代

はじめに：縄文時代の自然のようすと暮らし

現在の林。左がカシワ、右がハルニレ。約8,000年前にはこれらの木々が森をつくった。

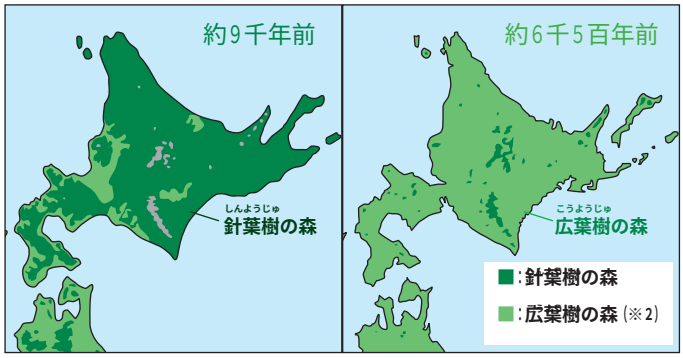
エゾシカ。

寒い「氷期（→ｐ52）」は終わりに向かい、地球は暖かくなっていきました。ただし何度か寒い時期もあり、とくに１万２千年前ころからは、２万年前ころにもどったようなひどい「寒のもどり」がありました。（→ｐ62）

このように寒暖をくり返しながらも暖かくなるにつれ、エゾマツやトドマツなどの針葉樹が減り、落葉広葉樹の森林が広がってきました。

およそ8,000年前には、今ある自然な林の木とほとんど同じような、ハルニレやオニグルミの木、カエデやドングリ（カシワやミズナラなどの仲間）の木、キハダの木といった木々が森を作っていました。

また、マンモスやバイソンなどの大型の動物は北海道からすがたを消し、エゾシカやヒグマ、ウサギやタヌキといった動物が増えていきました。



約9,000年前には、十勝平野の多くが針葉樹におおわれていたが、約6,500年前には今より暖かくなり、陸地がせばまり、平野のほとんどが広葉樹におおわれた。

（参考：「気候変動」より、改変）

河口が少し上流にあった「縄文海進」

およそ 6,000 年前、暖かさはピークをむかえました。平均気温は、今より２℃ほど高かったといいます。

陸の上にある氷がたくさんとけるため、海の水が増え、海水面が今より３～４m高くなりました。そのため、海に近い低い土地には海水が入りこみ、十勝川などの河口も、今より少し上流にありました。

こうしたようすを、海が陸に進んでくるので「海進」といい、この時期の海進を「縄文海進」といいます。（→ｐ64）

暖かくなったあと、寒くなっていく

およそ5,000～4,000年前になると、気候は寒くなっていきます。

トドマツやエゾマツなどの針葉樹や、シラカンバ（シラカバ）といった木が増えていきます。

寒さは地面をこおりつかせ、湿地では「十勝坊主」とよばれる、地面のもり上がりができました。

縄文時代の終わるころには、少し暖かくなり、その後も寒暖をくり返しながら、今日にいたっています（→ 昔の気温変化のグラフ ｐ62）。

帯広畜産大学（帯広市稲田町）の農場横にある「十勝坊主」。草の集まりではなく、地面がもり上がっている。

※１　落葉広葉樹（らくようこうようじゅ）：広葉樹（こうようじゅ：広く平たい葉を持つ樹木）のうち、冬（熱帯や亜熱帯では乾期）になると葉を落とす樹木のこと。

※２　広葉樹の森（こうようじゅのもり）：この場合は落葉広葉樹林。落葉広葉樹林には、比較的寒いところの「冷温帯落葉広葉樹林（れいおんたいらくようこうようじゅりん）：ハルニレやミズナラなどの林」と暖かいところの「暖温帯落葉広葉樹林（だんおんたいらくようこうようじゅりん）：クヌギやクリなどの林」がある。約6,500年前に

土器と弓矢を使う

およそ１万２千年くらい前[※3]から始まった縄文時代になって、大きく変わったことは、「土器」が使われるようになったことです。土器は、粘土をこねて形にし、火で焼いて作ったナベやカメなどの器です。（→ 土器づくり p88）

土器を使うことで、ドングリや野草などを食べるために、しぶみ（アク）をぬくことができ、また、料理法として、煮炊きができるようになりました。木の実を割ったりすりつぶしたりするための、すり石なども使われました。

また、ヤリだけでなく、弓矢を使って動物をとるようにもなりました。大きくてもクマやシカくらいという、小さくてすばしっこい動物をつかまえるためでしょうか？

さらに、魚をとる時には網を使うようにもなりました。（→ 川漁 p93）

土器づくり。

弓矢。

すり石と台石で植物加工。

石おので木を切る。

（イラスト：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※4）

竪穴式の家と集落

縄文時代には、「竪穴式住居」と呼ばれる家が建てられるようになりました。

地面を数十cmほり下げて床にして（これをタテの穴＝竪穴という）、柱を数本立てた上にヨシ（アシ）などの草や木の皮の屋根をかぶせたものです。この上にさらに土をかぶせるタイプもあります。床のまん中は火をたくところ（炉）で、ここで料理をし、家の中を暖めました。

また、移動しながらキャンプを続けていた旧石器時代とは変わって、同じ所にずっと家を持ち、２～５軒くらいの家の集まり（集落）をつくるようになりました。（ただし、季節によって移り住むこともあったようです）

（上）復元された竪穴式住居。

（右）復元作業。地面をほり下げ床にする。保温性は高い。（帯広・原始人の会）

（写真：2枚とも北澤実氏）

川の近くで、洪水にはあわない場所

集落は、多くが川を見下ろした高台に作られます。近くでわき水が出ることも大切だったようです。

川は水や魚を得られるところですし、「道路」としての意味も重要でした。（→ アイヌ文化と川 p118）

一方、高台であれば洪水にもあわず、水はけがよいため、気持ちよく住むことができます。

こうしたことは、旧石器時代の遺跡と同じです。ただ、縄文時代にはわりあい川に近い場所が選ばれることもありました。

季節によっては、河原のような場所に家をつくって住むこともあったようです。

暁遺跡のある高台（段丘：上札内Ⅱb面 →p54）。この遺跡には、縄文時代だけでなく旧石器時代の人も暮らしていた（→p78）。帯広市。

は、道南・道央の海岸部の一部と、本州東北地方の広い部分には暖温帯落葉広葉樹林が広がっていたという。（参考：「気候変動」より）

※3　１万２千年前（１まん２せんねんまえ）：この本では大正３遺跡の土器（→p83）をもって、十勝の「縄文時代の始まり」としている。

※4　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話 0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

縄文時代の自然のようすと暮らし

土器にも流行がある …「文様」や形のうつりかわり

縄文時代の「縄文」とは、縄を転がして土器につけた文様（もよう）のことです。縄文時代とは、基本的に、縄文のついた土器が使われる時代です。

ただし、時期によって文様は変わっていきます。

文様がついていないもの、ヘラで線を描いたもの、つめで文様をつけたもの、より糸を棒にまいておしつけたもの、四角や丸い型（スタンプ）をおしつけたもの、などさまざまです。

中には、川魚の骨をおしつけた文様もあります（→p92）。作る時の台にしたのか、底にホタテ貝の貝ガラやカシワの葉のあとがある土器もあります（→p91）。

また、形についても、オッパイ形の底をした土器、平らな底をしたもの、ボウルのような丸底やとがった底のもの、注ぎ口がついたもの、などというように、いろいろあります。（→p83、p92、p95、p96）

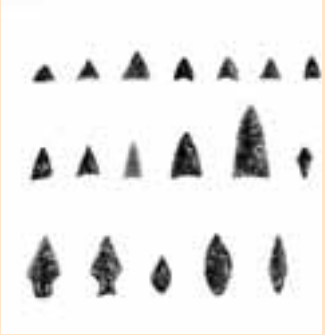
こうした土器の種類は、日本列島全体で同じ流れがあり、さらに地域ごとのバリエーションが見られます。

帯広百年記念館には、いろいろな時期の土器をならべたコーナーがあります。

時期によって変わっていく縄文時代の土器。（帯広百年記念館）

いろいろな土器の文様。（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※2）

縄文時代も「石器時代」… 石器の種類にちがいはある



石のヤジリ。縄文時代から作られる。

石おの。

石のヤリ先。

石のキリ。

旧石器時代に続いて縄文時代となります。

しかし、石器時代が終わったわけではありません。

石器時代の終わりは、石器にかわって鉄製や青銅製の道具（金属器）が使われるようになった時です。

日本列島で金属器が使われるようになるのは、続縄文時代（北海道）や弥生時代（本州以南）になってからです。しかも、続縄文時代や弥生時代でも、まだまだ石器は使われています。

ですから、縄文時代も（続縄文時代も）りっぱな「石器時代」なのです。

縄文時代の石器について、旧石器時代と最もちがうことは、矢の先につける「ヤジリ」が作られるようになったことです。また、全面をみがいた石おのが作られることも大きな特ちょうで、自然のようすが変わったことと関係しているようです。

そのほか、魚とりの網につけるおもりも作られるようになりました（→p93）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

※1　帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地　電話 0155－24－5352　月曜日休館

※2　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話 0155-41-8731　日・月曜日休館

縄文時代はいつからいつまで？ … 北海道では「続縄文時代」もある

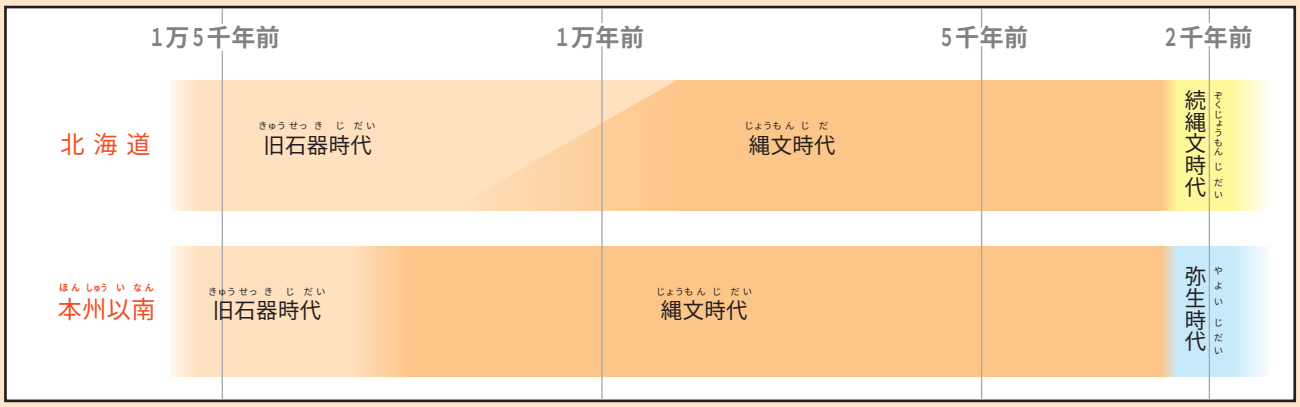
本州以南では、１万3,000年前ころを縄文時代の始まりとしています。

十勝でも、約１万 2,000 年前の土器が見つかっています（→ 大正３遺跡 p83）。しかし、次が約 9,000 年前の土器で、その間をつなぐ遺跡が見つかっていません。そのため、十勝に１万 2,000 年前ころから縄文文化が定着したかどうか、今のところわかりません。※3

およそ 9,000 年前になると、帯広市南部の「八千代遺跡（→ p 90）」をはじめ、十勝のあちこちで遺跡が見つかり出します。このころには、十勝は土器と弓矢の文化に入っていました。ただし、日本列島全体の縄文文化と同じになるのは 7,000 年くらい前になってからです。

縄文時代が終わるのは、およそ2,500年前、本州以南に稲作や金属の道具が広まったころです。本州以南では、「弥生時代」へと入ります。

しかし、北海道では農耕社会には移らず、自然の中から食料を得る生活が続きます。そこで、本州以南で弥生時代が始まってからを「続縄文時代」と呼んでいます。（→ p 100）



北海道と本州以南の時代のちがい。ただし、本州以南すべての地域が一気に同じ文化に変わったわけではない。

木や骨、角の道具も使われていた … 残っているものがすべてではない

紅葉山49号遺跡（石狩市）で見つかった、木でできた「櫂」。舟をこぐもの。

（写真：石狩市教育委員会蔵）

遺跡から見つかる道具は、土器や石器など長い間土の中にうまっていてもくさらないものがほとんどです。

しかし、木でできた器や道具、動物の骨や角で作られた釣り針やいろいろな道具（骨角器）もたくさん使われていました。

ただ、これらのものは、長い間にくさって土にかえってしまったので、見られなくなっただけなのです。

十勝では見つかっていませんが、貝塚※4や湿地の遺跡では、こうした道具がくさらずに残ることがあります。

例えば、石狩市の紅葉山49号遺跡では、4,000年くらい前の木製品（丸木舟の一部・舟をこぐ櫂・皿・石おのの柄など）が見つかっています。（→ p 93）

※３　縄文時代の始まり（じょうもんじだいのはじまり）：この本では基本的に、約１万２千年前を十勝における縄文時代の始まりとしている。

※４　貝塚（かいづか）：昔の人が食べた貝の貝ガラがたくさんたまっている遺跡。ただのゴミ捨て場ではなく、儀式（ぎしき）や祈り（いのり）の場とも考えられている。（→ p 94）

土器づくり … 1. 準備して形を作る

ここでは、土器づくりの大まかな流れを説明します。実際にうまく作るためには、各段階で、もう少し細かい技術が必要となります。

注意：土器づくりには、さまざまな「コツ」が必要です。とくに野焼きの時には危険な場合もあります。粘土を用意するところから、経験者に指導を受けるようにして下さい。

● 必要なもの

材料：粘土（ガケなどに露出していて、ねばり気のあるもの）
川砂（粘土の10%くらいの量）

形作り：大きな葉っぱ、または、板、ぞうきん、水、タコ糸、粘土板

文様（もよう）づけ：ヘラ、縄、貝ガラなど

野焼きのマキ：よく乾燥したもの。30cmの土器１個につき、10kgくらい（技術により変わる）

その他：シート、エプロン、など（野焼きの時には、軍手、火をつける道具、２～３mの棒など）

● 粘土に砂を混ぜてこねる

とってきた粘土は風通しのよい木かげなどに、くだいた状態で広げておきます（１週間以上）。

広げておいた粘土はカチカチにかわいています。石などの台の上で、ゴミをよけながら細かくくだきます。細かくくだいた粘土は、目の細かいふるいにかけます。

ふるいを通した粘土に、川砂（粘土の10%くらいの量）を混ぜ、水を加えて土を練ります。

練り上がった粘土は、むしろなどに包んで、１週間程度「ねかせ」ます。

ねかせた粘土はべたべたしますが、これがしっとりと粘着力のある粘土になるまで、時間をかけて練り上げます。

（慣れないうちは、市販の粘土を使ったり、機械で混ぜてもらうのが無難かも知れません）

● 土器の形をつくる

粘土をダンゴにして、葉っぱ（ろくろのかわり）の上でたたきつぶして円ばん状の底にします。高さ30cmの土器で厚さ１cm以上。

次に、粘土ひもを作り、平らにのばして、はば５cm・厚さ１cmくらいの板にします。これを底の上に一段一段積み上げていきます。くっつきやすいように水を少しずつつけて密着させます。つなぎ目をたんねんにヘラや指でこすってつぶし、すきまをなくします。

だいたいの形ができたら、口のへりを切りそろえるなどして整えます。

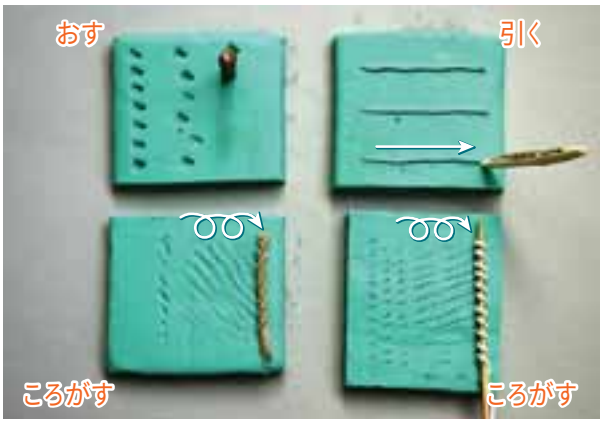
また、土器の外側と内側をヘラや小石、貝ガラなどでみがいて、形を仕上げ、水もれをふせぎます。

● 文様（もよう）をつける

表面が少し乾いたら、縄をころがして縄文をつけましょう。真横にころがしていくと、ななめの文様ができます。内側から手をそえて、形をくずさないように。

そのほか、細い粘土ひもをはりつけたり、ヘラなどで線を引いたり、貝ガラや棒をおしつけたりするなど、文様づけにはいろいろなやり方があります。

少し乾燥させて、表面をこすると少しツヤが出るようになったら、土器の内側を貝ガラや小石を使ってなめらかにします。水もれを防ぐためです。（土器の外側に手をそえるように）



文様のつけかた。縄を転がすと、ななめのもようができる。

参考：「縄文土器を作る」（帯広・原始人の会、帯広百年記念館友の会）
「縄文人になる！」関根秀樹、山と渓谷社、2002
「燃える男の土器の作り方のページ」園田（岩宿博物館友の会会員）
http://homepage2.nifty.com/sonodaworld/makesearthenvessel1.htm

土器づくり … 2. 野焼きする

かげ干しする

できた土器は、風の当たらない日かげで、ゆっくりと乾かします。２週間くらいは干します。急に乾かすと、ひび割れのもとです。

野焼き

まず、地面を乾かすためにたき火をします。この時、まわりに土器を置いて、ゆっくりあぶります。時々土器を回し、まんべんなくあたためましょう（１時間くらい）。

土器の色が変わり、地面の水分がぬけたら空だきは完了です。

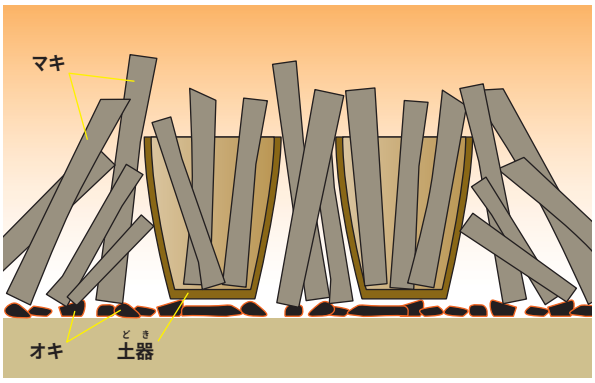
マキがオキ火（炭火のような状態）になったら平らにならし、その上に土器を置きます。

土器と土器の間や土器の中にもマキを差しこみ、さらに土器がかくれるくらいマキを周りに積み上げます。オキの熱で、マキには自然に火がつきます。

周りのマキが焼け落ちるころには、だいたい焼けています。長い棒を土器の間に差しこんで、そっと土器をたおし、火を寄せて底を焼きます。

その後、自然に冷めるのを待ち、取り出します。土器がまだ熱い時にさわって、やけどしないように。

火を完全に消して、安全を確認したら完了です。



土器の野焼きイメージ。マキで土器をおおってしまう。

火起こし … 木と木をこすりあわせて

かつては、くぼみをつけた板の上で、木の棒をキリのように回転させて火を起こしました。板はスギなどのやわらかい木、棒はヤマグワなどの固い木がいいようです。

ただ、初めての人にはむずかしいので、写真のようなもう少し便利な火起こし道具（江戸時代からのものらしい）を使うといいでしょう。ひものねじりを使って回転させ、おもりをはずみ車にしたものです。

木と木をこすりあわせることで「まさつ熱」をつくり出し、炭の粉をためます。そこへさらにまさつ熱を送りこむうちに、けむりが上がり、２㎜くらいの炭火がともります。

これを燃えやすいもの（ゼンマイの綿やタンポポの綿毛など。写真では麻ひもをほぐして鳥の巣のようにしたもの）に置いて包み、息をふきかけます。

もうもうとしたけむりが上がり、突然「ボッ」と火がつきます。あわてず落として、火ばさみで運びましょう。

最後に、つけた火は必ず完全に消すように。

得意、不得意はあるが、協力すれば子どもたちでも火が起きる。
（帯広市ジュニアリーダー養成講座あすかの会リーダーキャンプ）

「西積丹縄文ワールドのページ」北海道電力(株)原子力PRセンター「とまりん館」
http://www.hepco.co.jp/jomon/jomon/bunka/index.html

「本物志向の縄文土器をつくろう」（財）石川県埋蔵文化財センター
http://www.ishikawa-maibun.or.jp/taiken/jomondoki/jomondoki_taiken.htm

① およそ８千年前にあった集落

八千代にあった縄文時代の集落の想像図。

（想像図：帯広百年記念館蔵：※1）

およそ8,000年前、札内川支流の売買川が始まるあたり（帯広市八千代）の少し高くなったところに、家が２～５軒、建てられていました（八千代遺跡）。

地面を、直径４～６ｍくらいの円形に、深さ数十cmほり下げて床にした「竪穴式住居」です（直径１ｍの倉庫（？）や 10mの集会場（？）もありました）。（→ｐ85）

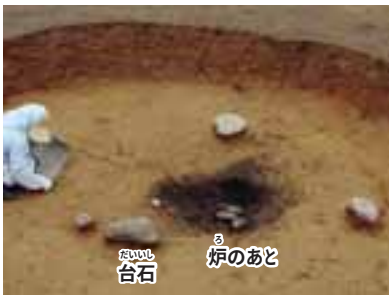
床のまん中は、たき火をする「炉」でした。

八千代ではしっかりした柱は使われず、細い木で骨組みを作り、その上を木の皮や毛皮でおおい、さらに土をかぶせて屋根としていたようです。

土地を開くために、また、家を建てる材料やたき木をとるためには木を切ります。その時には「と石」※2で石の表面をみがいて作った「石おの」が使われました。

八千代遺跡で見つかった木の実。

八千代遺跡のすり石と台石。



八千代遺跡の「炉」のあと。住居あとの床にあった。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※3）

八千代のメニュー

炉の周りの床には、40～50cmくらいある、平たい「台石」がおいてあります。

貯蔵用の穴にためておいたクルミやドングリをこの台石に乗せ、「たたき石」や「すり石」を使って割ったり、すりつぶしたりして下ごしらえをしました。

底が平らで深い「土器」にわき水を入れ火にかけて、木の実のアク（しぶみ）をとったり、煮炊きをしたりもしました。

あるいは、弓矢でとった動物の肉や売買川でとれた魚を火であぶったり、いろいろな材料を混ぜてねった「タネ」を、熱した石でじっくり焼き上げたりしたかも知れません。

そのほか、ヤマブドウやコクワ（サルナシ）といった、野生のくだものも、食事を豊かにしました。

夏には川を下って魚とり

八千代では、おもに秋～冬の間、木の実とりや狩りをおこなって暮らしていました。

春になると売買川ぞい（あるいは帯広川ぞい）に川を下り、十勝川など大きな川に近い場所、例えば、帯広市西８条13丁目の丘のへり（暁遺跡）などに住まいをかえたようです。そこでは、春から秋にかけて、石のおもり（石錘）をつけた網を使って、川魚をとっていました。（→ｐ93）

おそらく、春にはイトウ、夏から秋にはサケが一番のえものだったことでしょう。

以前、十勝川でおこなわれていた網によるサケ漁（採卵用）。平成８年（1996）の写真。

※１　帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘２番地（緑ヶ丘公園内）電話：0155 - 24 - 5357　月曜日休館

※２　と石（といし・砥石）：石材をみがいて美しくしたり、刃物をすって切れ味をよくしたりするため（研ぐ〔とぐ〕ため）の石。

千年以上使われた場所 … 八千代遺跡（八千代A、C遺跡）

「八千代遺跡」は、帯広市平野部の南西のはし、日高山脈ふもと近くの八千代町にあります。昭和60～63年（1985～88）に発掘調査が行われました。

遺跡は、売買川最上流部（今では直線的な水路）にそってあり、帯広川の支流の始まりも近くにあります。

この遺跡では、8,000～7,500年前ころの「暁式土器」がある竪穴式住居あとが、103軒見つかりました。

といっても、同じ時期に103軒の家が建っていたわけではありません。２～数軒の家が建ち、十数人の人が暮らす集落が、人や場所を少しずつ変えながら続いていたようです。

ほかの遺跡の竪穴式住居あとには、柱を立てた穴がよくありますが、八千代遺跡では見つかりませんでした。しっかりした柱ではなく、細い木を組み合わせて屋根の支えとしていたようです。

この遺跡で見つかった土器や石器などは、帯広百年記念館で見ることができます。※1

発掘された時の八千代A遺跡の全景。おくの林の中に八千代C遺跡。
（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

八千代遺跡の位置。
帯広市八千代町。

発掘されていない八千代C遺跡。林の中の丘にある。右手前の細い水路が売買川上流部。

ホタテ貝のあとがある土器 … 観察のポイント

（右）八千代遺跡の土器。底にホタテ貝のカラのあとがついている。
（帯広百年記念館）

土器底のホタテ貝のカラのあと。
（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

残されている遺跡と水路の流れ

八千代遺跡は、半分くらい（C遺跡）が手つかずのまま、道道216号ぞいの小高い丘に残されていています。八千代神社の周りの林です。ここにも集落がありました。

道路ぞいに水路があり、これが売買川です。流れは直線化されていますが、それでも、暮らしの身近に川がある生活を、想像できるのではないでしょうか。

土器の底にはホタテ貝のあとが

八千代遺跡で見つかった土器は底が平らで、ホタテ貝のあとがついています。帯広百年記念館で確かめてみましょう。

ホタテ貝は海の貝です。海まで行ったのでしょうか？それとも、海ぞいの人と、交流があったのでしょうか？

「暁遺跡」の土器と同じ仲間

八千代遺跡で見つかった土器は、それより前に暁遺跡（帯広市：→p79）で見つかっていた土器と同じタイプの「暁式土器」でした。

※3　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話 0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

① およそ８千年前にあった集落

アムール川とのつながり … 独特なヤジリ「石刃鏃」

帯広市の「大正遺跡」や浦幌町の「浦幌新吉野台細石器遺跡」「共栄Ｂ遺跡」は、およそ7,500年前の遺跡です。今とほぼ同じ暖かさのころです。

これらの遺跡では「石刃鏃」というヤジリ（矢の先）が見つかりました。

石刃鏃は、石からうすくはがし取るという旧石器時代から伝わる技によって「石刃」という石器を作りだし、それを加工するという独特な方法で作られたヤジリです。

石刃鏃は、シベリアやモンゴルなど大陸の広いところに広がっていました。

大正遺跡などの石刃鏃やいっしょに見つかった土器、それに家のあとのようすは、大陸のアムール川ぞいの遺跡のものと似ています。

およそ7,500年前、アムール川の人たちが、サハリンを通り海をわたって、途別川や浦幌川までやって来ていたのでしょうか。

アムール川とサハリン。

大正遺跡。帯広市大正町。

大正遺跡（帯広市）で見つかった石刃鏃というヤジリと石刃。

大正遺跡（帯広市）で見つかった、石刃鏃を使う文化の土器。日本の縄文土器的ではない。円内はペンダントと顔料のもと。

（石器・土器の写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※1）

売買川の（?）魚の骨で、もようつけ … 稲田１遺跡の土器の文様

稲田１遺跡で見つかった土器とその表面にあった魚の骨による文様。

（帯広百年記念館埋蔵文化財センター）

サケの仲間であるヤマメ。ただし、土器の文様の魚がヤマメだったかどうかまではわかっていない。

帯広市の稲田小学校の西向かいには、「稲田の森」と呼ばれるカシワなどの林があり、そこから北へ坂を下りると売買川の流れがあります。

逆に稲田の森の南側、売買川から見ると小高くなったところには「稲田１遺跡」があります。

稲田１遺跡からは、旧石器時代から縄文時代にかけての土器や石器、落とし穴のあとなどが見つかっています。

その中に、およそ6,500年前の土器がありました。その土器には、サケの仲間[※2]の骨をおしつけたもよう（文様）が入っていました。

売買川でとれた魚なのでしょうか？

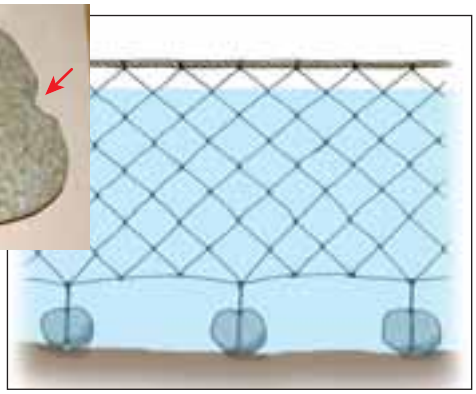
稲田１遺跡の位置。
帯広市西16・17条南40・41丁目。

※１　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話　0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

※２　サケの仲間（サケのなかま）：サケ科の魚。サケ、ヤマメ（サクラマス）、オショロコマ、アメマスなど。

縄文時代の川漁 … すでに基本は今と同じに

（上）石のおもり。くぼみがついている。
（帯広百年記念館：※3）



石のおもりの使用イメージ。

縄文時代の人々にとって、サケなどの川魚は大切な食べ物でした。ですから、川での漁をさかんにおこなっていました。

豊頃町の「高木１遺跡」、浦幌町の「平和遺跡」や「下頃辺遺跡」からは、小さなくぼみがつけられた石がたくさん見つかっています。くぼみのおかげで、ひもをしばりつけやすくなっています。

これは、およそ7,500年前、川で魚をとる時に網につけられたおもり（石錘）です。

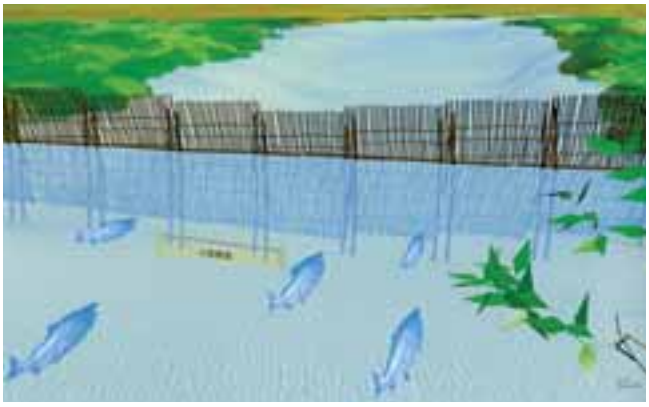
石狩市にある「紅葉山49号遺跡」では、およそ4,000年前の「エリ」という川魚をとるしかけが見つかりました。エリは、川の流れの中に木のくいの列を作ったもので、魚をワナの方へ向かわせるしかけです。

紅葉山49号遺跡のエリには、サケ・マスをとるためのものと、くいの間をヤマブドウのつるで編みこんだ、小さな魚をとるためのものとがありました。

このほか、タモ網、丸木舟（一部分）、舟をこぐための櫂、魚をたたくための棒、魚をつくためのモリやヤス（石製や骨角製）、たいまつ用の道具、舟の形をした皿、すだれのように細い木がたくさんならんだもの（柵？）などが見つかり、縄文時代には今に通じる川漁がおこなわれていたことがわかりました。

残念ながら、こうしたあとは十勝では見つかっていません（木の道具はふつうくさってしまう）が、同じ方法で漁がおこなわれていたのかも知れません。

紅葉山49号遺跡（石狩市）で見つかったエリのあと。木のくいが一列にならんでいる。
（写真：石狩市教育委員会蔵）



エリのイメージ。
（CGイラスト：石狩市教育委員会蔵）

チョウザメ。十勝川には昭和時代なかばまでいたという。
（浦幌町立博物館：※4）

芽室町の西士狩４遺跡（およそ 6,000 年前）では、サケ（？）、イトウ、ウグイの仲間とともにチョウザメの骨が見つかりました。

チョウザメがここまで十勝川をのぼっていたこと、また、ウグイの仲間がマルタ（河口近くから海にすむ）らしいということから考えると、このころの十勝川河口は、かなり上流に入りこんでいたようです。

当時は今よりも暖かく、海水面が高くなっていた「縄文海進（→ｐ84）」のころでした。

※３　帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地　電話 0155 - 24 - 5352　月曜日休館

※４　浦幌町立博物館（うらほろちょうりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16 - 1（らぽろ21内）電話 015 - 576 - 2009　月曜日休館

② 今より暖かかったころの暮らし

十勝川温泉１遺跡のある段丘（音更町十勝川温泉浄化センター）。道を手前に下って行くと十勝川。右下は見つかった土器（音更町郷土資料室：※1）。

およそ6,000年前、暖かい時期がやって来ました。平均気温が今より２℃くらい高く、海水面も今より３～４m高くなっていました。海が陸の方に入りこみ、河口も今より少し上流にありました。（→p84）

このころ、十勝川温泉の浄化センターあたり（音更町）に、暮らしている人がいました。今は、十勝川より３mくらい高い場所です（十勝川温泉１遺跡）。

家は、床をほり下げた「竪穴式」ですが、床の形は角が丸い長方形です（大きいもので 3.7m× 2.7m）。床は平らではなく、段差がつけてありました。

この人たちは、底が丸いボウルのような土器や、底がとがった土器を使っていました。

（上）小林遺跡（芽室町）。墓の見つかった場所。

（右）小林遺跡で見つかった墓。

（写真：芽室町ふるさと歴史館ねんりん蔵）

墓と「捨てる場所」

十勝川温泉１遺跡の家の近くには、墓が作られていました。

同じころ、芽室町の美生川と十勝川にはさまれた、段丘の上にも墓が作られていました（小林遺跡：右ページ）。

墓には副葬品※2として石器などが入れられ、「C」の形をした耳かざり（玦状耳かざり）が入れられることもありました。

この芽室の墓の周りは、土器（丸い底）・石器・土偶などを「捨てる場所」だったようです。ただし「捨てる場所」は、今のゴミ捨て場とは全くちがいます。

大切なものや使い終わったものなどを神に送り、あるいはものを「神」や「人」として見て、感謝や祈りをささげる、そんな場所だったようです。だから、人の墓と同じ場所にあったのでしょう。（→ カムイ p134）

落とし穴でシカをとる

それから数百年たったころ、今「JICA帯広」や「森の交流館・十勝」がある丘の上にも、人が暮らしていました。帯広川やその支流が流れる湿地を見下ろす場所です（宮本遺跡・帯広市）。

そこで暮らす人は、落とし穴をつくってシカをとり、あるいは木の実を集めて加工していました。

落とし穴は、2 ～ 4m× 1m、深さ 1 ～ 1.5mで、丘から流れ落ちる小川（19条川）に水を飲みにやって来たシカを追いこむような形でつくられていました。

そのほか、北明１遺跡（芽室町）や共栄３遺跡（清水町）、あるいは、八千代遺跡や稲田１遺跡（帯広市）でも落とし穴がつくられています。

（上）宮本遺跡（帯広市）。今はJICA帯広の敷地。

宮本遺跡で見つかった落とし穴。

（写真：2枚とも、帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※3）

※1　音更町郷土資料室（おとふけちょうきょうどしりょうしつ）：音更町希望が丘1番地（農村環境改善センター内）電話 0155 - 42 - 4099

※2　副葬品（ふくそうひん）：亡くなった人の亡きがらといっしょに、埋葬（まいそう）されたもの。

※3　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話 0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

人の生死を見つめる神聖な場所 … 小林遺跡

日高山脈から流れ下る美生川は、芽室町の中央を通って南西から北に向かい、十勝川に合流します。この美生川と十勝川にはさまれた段丘の上に、「小林遺跡（芽室町）」があります。

小林遺跡からは、墓のあと８個と、墓以外の穴のあと94個が見つかりました。また、合わせて10万点をこえる、土器（丸い底）・石器・土偶などが見つかりました。

このようすから、この場所は使い終わった道具を神に送る「捨てる場所（廃棄の場）」だと考えられています（94ページ参照）。

今では住宅地と畑になっていますが、およそ6,000年前の人にとっては、何かしら「神聖な」ところと感じられたのでしょうか。

土偶は３つあり、もとの形がわかるものには、オッパイがついていました。子どもを産み育てる女の人の力を大切に思っていたようです。

見つかった土器などは、芽室町ふるさと歴史館「ねんりん」※4に保管され、その一部が展示されています。

（上）小林遺跡（芽室町）の「捨てる場所」。祈りの場所でもある。（写真：芽室町ふるさと歴史館ねんりん蔵）

小林遺跡の位置。芽室町東9条10丁目・北1線。

小林遺跡のある段丘。美生川の堤防から。

ボウルのような土器 … 観察のポイント

小林遺跡の土器。底に丸みがあるものが多い。

小林遺跡の玦状耳かざり。

小林遺跡の土偶。タテ約5㎝。

（写真：3枚とも、芽室町ふるさと歴史館ねんりん蔵）

遺跡のある場所と川の流れ

勝手に畑や人の家の庭に入ってはいけませんが、道を歩きながら、小林遺跡のある場所を見てみましょう。美生川と十勝川がどちらにあるか、わかりますか？

また、美生川の堤防の上を歩いて、下から見上げてもみましょう。あなたは、「神聖さ」を感じますか？

ボウルのような丸底土器

小林遺跡の土器はバケツのような大型の深いものと、ボウルのような形のものがあり、底は丸みをもっています。表面には、太い縄目のもようがつけられています。

耳かざりや土偶

女の人の土偶や「C」形の耳かざり（玦状耳かざり）も見てみましょう。土偶は、リアルではありませんが、デフォルメ※5された中に、女の人のやわらかさとたくましさが表現されています。

第1章 十勝の平野や川ができるまで
第2章 先史時代と川
第3章 アイヌ文化と川
第4章 十勝開拓と川
第5章 発展、今、そして未来へ
用語
さくいん

※4　ふるさと歴史館ねんりん（ふるさとれきしかんねんりん）：芽室町美生2線38 - 15（旧美生小学校）電話 0155 - 61 - 5454　火曜日休館

※5　デフォルメ（déformer：フランス語）：美術などでものを表現する時、そのままの形ではなく変形させること。

③ 寒くなったころの「墓地」

針葉樹と広葉樹が混ざっている秋の林（上士幌町糠平湖岸）。深緑が針葉樹。4,000年前ころから寒くなり、平野でも針葉樹が増えた。

4,000年前ころから、だんだんと寒くなっていきました。世界に氷河が増え始め、海の水が減り、陸地が少し広がります（海退という）。

十勝の丘では、ドングリの木（ミズナラとカシワ）やイタヤカエデが少し減りました。かわりに、トドマツやエゾマツなどの針葉樹と、シラカンバ（シラカバ）が増えていきます。

湿地では、こおった土が部分的にもり上がり、とけて周りがけずられる、というくり返しの中で、「十勝坊主（→p84）」という、もり上がりのある地面ができました。（帯広市の帯広畜産大学農場・更別村の上更別湿原〔→p63〕・音更町の東音更など）

上利別20遺跡の土器。
（写真：足寄町教育委員会蔵）

池田3遺跡の動物形土製品。
（写真：池田町教育委員会蔵）

上利別20遺跡の位置。足寄町鷲府。

石が集められた墓

およそ3,000年前、利別川の支流、足寄町ベラボナイ川ぞいの段丘の上に墓が作られていました（上利別20遺跡）。

そのひとつには、ベラボナイ川の石（20～40cm）が262個も集められています。特別な人の墓だったのでしょうか？

この遺跡では「きゅうす」のような注ぎ口のついた土器、土でできた耳かざりや腕輪（→p99）、「うるしぬり」がされたクシ（？）などが見つかっています。

同じころ、池田町の利別川近くでは、土でキノコの形やモモンガのような動物の形のもの、あるいはスタンプが作られていました（池田３遺跡：→p98）。

十勝川をはさんだ丘の墓

およそ2,500年前、十勝川の本流ぞいにある丘の上（音更町宝来）と、十勝川や札内川をはさんだ対岸で、札内川と途別川の間にある丘の上（幕別町依田）に、墓がつくられていました（相生１遺跡と札内Ｎ遺跡）。

相生１遺跡の墓には、土器がスッポリと入れられ、焼けたイノシシ※1やワシ、魚の骨が混ざった土でうめられたものもありました。また、墓の周りには火をたいたあとがあります。亡くなった人を送る儀式が、おこなわれていたのかも知れません。

相生1遺跡と札内N遺跡の位置。

相生1遺跡（音更町）で見つかった、スッポリとうめられた土器。右上はこれを復元したもの。（写真・復元土器：音更町郷土資料室蔵：※2）

※1　イノシシ：イノシシは北海道には生息していない。しかし、縄文時代も終わりごろになると、北海道内各地の遺跡からイノシシの骨やキバが見つかるようになる。飼われていた、という説と、骨付きの肉が持ちこまれたのだ、という説がある。

※2　音更町郷土資料室（おとふけちょうきょうどしりょうしつ）：音更町希望が丘1番地（農村環境改善センター内）電話 0155 - 42 - 4099

今は消えた遺跡の丘 … 札内N遺跡

「札内N遺跡（幕別町）」は、札内川の東にある段丘の上面（上札内Ⅰ面・上札内Ⅱa面〔→p54〕）にあります。かつては、札内川の本・支流や十勝川の支流が流れる氾濫原※3を見下ろす場所でした。

この丘をくずして、家や道路をつくるための土や砂利をとることが決まり、その工事前に発掘調査がおこなわれました(平成５～10年〔1993～98〕)。発掘調査では、およそ2,500年前の墓が141ヵ所見つかりました。

焼いた土でうめられた墓、石でうめられた墓、黒曜石のかけらがたくさん入った土でうめられた墓など、いろいろなタイプがあり、土偶やたくさんの土器が入れられた墓もありました。

この遺跡の近くにある「札内K遺跡」からも８基の墓が見つかっていて、十勝川と札内川を見下ろす札内の丘全体が、当時、「神聖な場所（墓域）」とされていたようです。

調査のあと工事が進められ、遺跡のあった丘はかなり消えてしまいました。

札内N遺跡（幕別町）で見つかった墓。くぼみのある石を集めて、壁ぎわにならべてある。（写真：幕別町教育委員会蔵）

札内N遺跡と札内K遺跡の位置。幕別町字依田。

札内N・K遺跡の方から見た札内の住宅地。かつては氾濫原だった。遠くに見える丘に相生1遺跡がある。

大きな墓にはだれがねむっていたのだろう？ … 観察のポイント

大きな石がたくさんあった。墓をつくるための石が集められていたのか？（写真：幕別町教育委員会蔵）

札内N遺跡で見つかった土器。（写真：幕別町教育委員会蔵）

今も同じ丘に墓がつくられている。札内新墓地。

大きな石がたくさん集められた場所

札内N遺跡には、10m以上の大きさがある穴があり、そこからは、１～２mあるような石がたくさん見つかりました。

いろいろな形をした土器も

札内N遺跡では、「鉢」や「つぼ」、「コップ」や「皿」の形をした土器や、「舟」のような形をした土器が見つかりました。表面には、細かい縄文（縄をころがしてつけるもよう）が全体につけられ、そこに、細い線や丸い穴といったもようがつけられ、粘土がはりつけられてもいます。

幕別町ふるさと館※4で見ることができます。

今も墓地がある

札内N遺跡や札内K遺跡のあった丘には、今「札内新墓地」や「札内墓地」があり、東側の斜面には札内神社があります。数千年をこえて、現代人にも通じる「何か」があるのかも知れません。

※3　氾濫原（はんらんげん）：川の近くにあり、川が氾濫する（あふれる）と水につかる低い平地。（→p46）

※4　幕別町ふるさと館（まくべつちょうふるさとかん）：幕別町依田384-3（依田公園横）　電話 0155 - 56 - 3117　月・火曜日休館

寒くなったころの生活のあと … とくに少なくなる家の遺跡

寒くなってきた4,000年前ころから、遺跡の数、とくに家のあとがめっきり減ります。一方で、墓のあとはたくさん見つかっています。

このころには、十勝だけでなく日本列島東部全体で遺跡の数が少なくなっています。やはり、寒くなったことが理由のようです。

ただ、墓はつくるけれど近くに人は住んでいない、ということはあまり考えられません。

それまでの遺跡があった「川を見下ろす丘のへり」ではなく、もう少し低い「斜面の途中」や「川に近い場所」で暮らすようになったのかも知れません。

池田町の「池田３遺跡」は、もともとの十勝川[※1]と利別川の合流点近く、今の利別川の堤防から見下ろすことのできる、清見二線川ぞいの低い場所にあります。

（上）利別川上空から見た発掘している時の池田３遺跡。
（写真：池田町教育委員会蔵）

（右）池田３遺跡の位置。
池田町字西２条３丁目。

縄文時代の墓 … 体をおり曲げる

縄文時代の埋葬のようす（小林遺跡の墓をもとにしている）。
（イラスト：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※3）

いろいろなものが入れられていた墓。ここでも赤い顔料（ベンガラ：右写真）が見つかっている。（大正８遺跡：帯広市）（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

縄文時代の墓は、多くが地面に穴をほって亡きがらをうめたものです（土壙墓という）。屈葬といって、亡きがらが、ひざをかかえるような形におり曲げられています。

副葬品[※2]として、石器などがいっしょにうめられることもよくあり、小林遺跡（芽室町：→p95）の墓からは、Ｃの形をした耳かざり（玦状耳かざり）が見つかっています。また、この墓からはベンガラという赤い顔料が見つかっていて、墓穴の底が赤くぬられていたようです。

また、そのほかの遺跡からは、石でうめられたもの、焼かれた土でうめられたもの、黒曜石のかけらがいっぱい入った土でうめられたもの、土器がたくさん入れられたもの、石器がたくさん入れられたもの、なにも入れられていないもの、など、さまざまなタイプの墓が見つかっています。

決まった場所に墓がいくつも作られるようになるのは、およそ6,000年前からのことです。小林遺跡では６つの墓が集中していました。また、札内Ｎ遺跡（幕別町：→p97）では、およそ2,500年前の墓が100以上集中してつくられていました。

相生１遺跡（音更町：→p96）で見つかった墓では、埋葬の時にイノシシ・ワシ・魚を焼き、その焼けた骨といっしょに土でうめる、ということがおこなわれていたようです。このことは、埋葬する時に儀式（葬儀・葬式）がおこなわれたことを想像させます。

※１　もともとの十勝川（もともとのとかちがわ）：統内新水路（とうないしんすいろ）完成の昭和 12 年（1937）まで、十勝川は今のオシタップ川下流部を流れていて、利別川は池田町利別南町で合流していた。（→ 統内新水路 p190）

※２　副葬品（ふくそうひん）：亡きがらといっしょに墓に入れられるもの。

※３　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話 0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

縄文ファッション … さまざまなかざり

● 縄文時代の服

縄文時代の遺跡からは、ぬい針や糸、せんい製品などが見つかっています（十勝では見つかっていませんが、くさって土にかえったのでしょう）。

縄文の人々は、植物のせんいを編んだ「布」や動物の毛皮などで服を作っていたようです。

● 縄文時代のアクセサリー（装身具）

旧石器時代（15,000年くらい前）には、すでに、かんらん石※4やコハク※5のビーズ玉が作られていました（知内町の湯の里遺跡など）。そして、縄文時代には、今あるほとんどの装身具が（材料はちがうが）作られるようになりました。

ヘアピン・くし・ヘアバンド・耳かざり・ペンダント・ネックレス・ブレスレット・腰かざりなどなど。最近も流行しているタトゥー（入れ墨）やボディーペインティングもおこなわれていたようです。

こうしたものは、ただ身をかざるためだけのファッションではなく、まじないの道具だったり、悪霊から身を守る意味があったり、また、自分をりっぱに見せるためだったのかも知れません。

ただ、見方によれば、身をかざって美しく・かっこよく見せたり、恋人同士がおそろいのネックレスや指輪をつけたりする「ファッション」は、人の心をあやつる「まじない」のひとつなのではないでしょうか？

● 十勝縄文の装身具 1

八千代遺跡（→ｐ90）や暁遺跡（→ｐ79)(帯広市）では、およそ 8,000 年前のビーズ玉 (かんらん石※4、蛇紋岩※6）やペンダント（コハク※5、泥岩※7）が見つかっています。これらのかんらん石やコハクは、大陸から持ちこまれたものではないか、と考えられています。

八千代遺跡では、親指の頭くらいのメノウを戸蔦別川から拾ってきて、穴を開けかけたものが見つかっています。いっしょに穴あけ用のキリ（石器）も見つかっていて、何かの事情で作業を中断したようです。

6,000年くらい前には、小林遺跡（芽室町：→ｐ95)で、Ｃの形をした「玦状耳かざり」が使われていました。墓に埋葬された人の、頭の近くに置かれていたようです（左ページ）。

同じタイプの耳かざりが、大陸の東アジア一帯に広がっていました。十勝では、ほかに十勝川温泉１遺跡（音更町：→ｐ94）でも見つかっています。

十勝で見つかったものですが、材料は遠い場所で産出した蛇紋岩であること、また、とてもていねいな作りであることから、多くは遠くの場所で専門的な「職人たち」の手によって作られたものだと思われます。

5,000年くらい前に道央から道東北部で使われていたヒスイ玉は、新潟県の糸魚川産のヒスイで作られていることが、蛍光Ｘ線分析という方法で確かめられています。

(左) 腕輪と滑車状耳かざり (上利別20遺跡：足寄町)。　**(右) 八千代遺跡 (帯広市) で見つかった玉やペンダント。**

● 十勝縄文の装身具 2

縄文時代が終わりに近づくと、北海道東北部を中心に、コハク玉※5が大量に副葬※2されている墓がつくられます。十勝でも池田３遺跡につくられていた墓から、いろいろな形をしたコハク玉が141個見つかりました。

これらのコハクは、サハリン産ではないかといわれています。

上利別20遺跡（→ｐ96）の3,000年前ころの墓からは、土を焼いて作られた滑車のような形をした耳かざりやうるしぬりのクシ（のようなもの）が見つかり、さらに、もう少し新しい時期の腕輪（ブレスレット：土製）も見つかっています。

● 縄文ファッションは世界をつなぐ

このように身をかざる文化は、とても長い歴史を持っています。

そして、装身具を調べることで、縄文時代には北海道と本州、あるいは大陸との間に、広く交流があったことがわかります。石器や土器とともに、縄文ファッションも世界をつないでいたのです。

縄文ファッション
左上から、耳かざり、ネックレス、ブレスレット（腕輪）。
右上から、クシ、ヘアピン、ペンダント、貝のブレスレット。

(写真左：足寄町教育委員会蔵、写真右とイラスト：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

※４　かんらん石（かんらんせき）：鉱物（こうぶつ）の一つ。固く、オリーブのような緑色。透明で割れ目の少ないものは宝石（ペリドート）とされる。
※５　コハク（琥珀）：木の樹脂（じゅし）が地中にうまり、長い年月をかけて固まった宝石。
※６　蛇紋岩（じゃもんがん）：かんらん岩（かんらん石を多くふくむ岩石）が水と反応してできる岩石。表面に蛇（ヘビ）のようなもようが見られることから名づけられた。
※７　泥岩（でいがん）：泥が海底や湖底などにたまり、固まった岩石（→堆積岩ｐ28）。

3. 続縄文時代・擦文時代

①「縄文の文化」は続く・続縄文時代

■：続縄文文化の広がり。続縄文時代後半期には続縄文の土器が、東はエトロフ（択捉）、北はサハリン南部、南は新潟県や仙台平野まで広がった。

およそ2,500年前から、本州以南には水田での米作りと金属の道具を使う文化が広がり「弥生時代」に入ります。

一方、北海道、そして十勝では米作りがおこなわれず、自然の中から食べ物や道具を得ることを中心とした生活が続けられていき、「続縄文時代（～約 1,200 年前＝７・８世紀ころまで）」と呼ばれます。家も竪穴式住居[※1]です。

北海道西南部では、ソバなどの畑も少し作られるようになります。また、本州の東北地方の北部では、米作りが伝わりながらも「続縄文文化」的な暮らしであったようです。

北海道全体で見ると、前半は海での漁がさかんにおこなわれ、後半になると、川での漁がさかんになります。

池田3遺跡で見つかった鉄の道具（つり針？）。
（写真：池田町教育委員会蔵）

鉄も伝わるが、石器などが中心

およそ2,000年前、池田町の旧十勝川[※2]（今は利別川下流）あたりでは、鉄の道具（つり針？）が使われていました。本州かサハリンから、持ちこまれたもののようです。とはいえ、ほとんどの道具は、これまでどおり、石や木、動物の骨や角から作られていました。（池田３遺跡 →p98）

この川近くの少し高いところに、竪穴式住居が作られ、墓もありました。

墓の一つには、亡くなった人といっしょに、小さな土器、石器、コハク玉などが入れられました。このコハクは、サハリンからもたらされたのかも知れません。

十勝川河口の暮らし

およそ2,000年前、今の浦幌十勝川河口[※3]近くに暮らしていた人たちがいました（十勝太若月遺跡：浦幌町）。

ここの丘にも墓が作られていて、コハク玉などが入れられたものもあります。

千数百年前になると、寒くなります。このころからは、同じ丘の少し高いところに、墓が作られました。

中には、シラカンバ（シラカバ）の木の皮を底にしいた上に亡くなった人を置き、こい緑色やうすい青色の「ガラス玉」などがいっしょに入れられた墓もありました。ガラス玉は、弥生文化から持ちこまれたようです。

十勝太若月遺跡で見つかったものは、浦幌町立博物館[※4]で見ることができます。

十勝太若月遺跡で見つかった墓が発掘された時の実物大模型。（浦幌町立博物館）

十勝太若月遺跡のガラス玉。
（写真：浦幌町教育委員会蔵）

（右下）遺跡の位置。浦幌町字下浦幌。

※1　竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）：地面を数十cmほり下げて床（ゆか）と壁（かべ）にして、柱を数本立てた上に草や樹皮の屋根をかぶせてつくる住居。（→p85）
※2　旧十勝川（きゅうとかちがわ）：十勝川は、昭和12年（1937）の工事までは池田市街近くを流れていた。（→p190）
※3　浦幌十勝川（うらほろとかちがわ）：もともとの十勝川下流部。昭和38年（1963）の工事で、十勝川と切りはなされてこの名前がついた。（→p208）

海から内陸の暮らしへ

続縄文の人々は、海ぞいの暮らしからだんだんと内陸の川ぞいでの暮らしへ移っていきました。

十勝ではありませんが、石狩川河口から20㎞上流の千歳川合流点近くでは、サケがとられ、その加工がおこなわれていました（江別太遺跡：江別市）。

川が曲がったところで、川底に木のくいをならべて打ちこみ、ブドウづるやヤナギの枝をからめたしかけをつくっていました。ヤスやモリ、あるいは釣りざおなども使われていたようで、丸木舟をこぐ櫂も見つかっています。

今の札幌駅周辺の旧琴似川の支流でも、サケがとられ、焼き干し※5やくんせい※6づくりなどの加工がおこなわれていました（K135遺跡：札幌市）。

この場所からは、本州の弥生文化の土器と、サハリン方面の土器が見つかっています。ここで加工したサケを「輸出」し、かわりに土器を手に入れたのかも知れません。

十勝の内陸では、音更川の上流、今の糠平湖岸で、高さ35㎝、口の直径が32㎝もある、大きな土器が見つかっています（糠平湖岸遺跡：上士幌町）。黒曜石を取りにきた人が、キャンプをしてナベに使ったのでしょうか。

それにしても、下流からここまで土器を運んでくるのは大変なことです。かなり苦労したことでしょう。

江別太遺跡（江別市）で、サケの骨が見つかったところ。ほかにスズキの骨も見つかっている。（写真：江別市郷土資料館蔵）

糠平湖岸遺跡で見つかった続縄文時代の土器。（帯広百年記念館埋蔵文化財センター：※7）

糠平湖岸遺跡の位置。上士幌町。糠平湖は昭和時代にできたダム湖。

もう少し細かいこと

なぜ北海道に「弥生」はなかった？

おおざっぱにいえば、「弥生文化＝水田稲作（米作り）」です。北海道にも、米は伝わっていました。しかし、水田稲作は明治になるまでおこなわれませんでした。

北海道が寒かったために、水田がうまくいかなかった、ということもあるでしょう。

ただ、それよりも、秋にもっと確実な「サケ」という自然の「収穫」があったことが大きな理由だったのではないでしょうか？　その年々の気候に左右されず冷害もなく、安定して冬越しの食べ物を手に入れることができていたのです。

続縄文文化とアイヌ文化のつながり？

続縄文時代に続いて、北海道は「擦文時代」そして「アイヌ文化期」へと移っていきます。

続縄文時代後半の土器の文様（もよう）には、アイヌ文化の文様（→p133・p141）を思い起こさせるものがあります。つながりがあるのかも知れません。

続縄文時代の土器の文様。

東西に分かれる続縄文前期

続縄文文化と一口でいいますが、前半と後半に分かれます。

前半期には、北海道の中でも東西で異なった土器の文化に分かれます。西南部では「恵山式」という、弥生文化とのかかわりが大きな土器が使われ、東北部（十勝も）では「宇津内式」や「下田ノ沢式」という土器が使われます。

後半期には、北海道全体が「後北式」という土器を使う文化にふくまれ、この土器はサハリン南部から本州東北地方まで広がりました。

「玄関」のついた家

十勝では見つかっていませんが、続縄文時代の竪穴式住居には、一部分がつき出た形の竪穴がつくられたものがあります。出入り口だったようです。

こうしたつくり方は、もっと緯度が高い北の地域に住む人たちの家とよく似ています。

復元された「玄関」のある竪穴式住居。（写真：北澤実氏）

※4　浦幌町立博物館（うらほろちょうりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16 - 1 らぽろ21　内電話　015 - 576 - 2009

※5　焼き干し（やきぼし）：魚を焼いてから干して、保存性を高めたもの。

※6　くんせい（燻製）：魚や肉をけむりでいぶして、保存性（や風味）を高めたもの。

※7　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26　電話　0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館

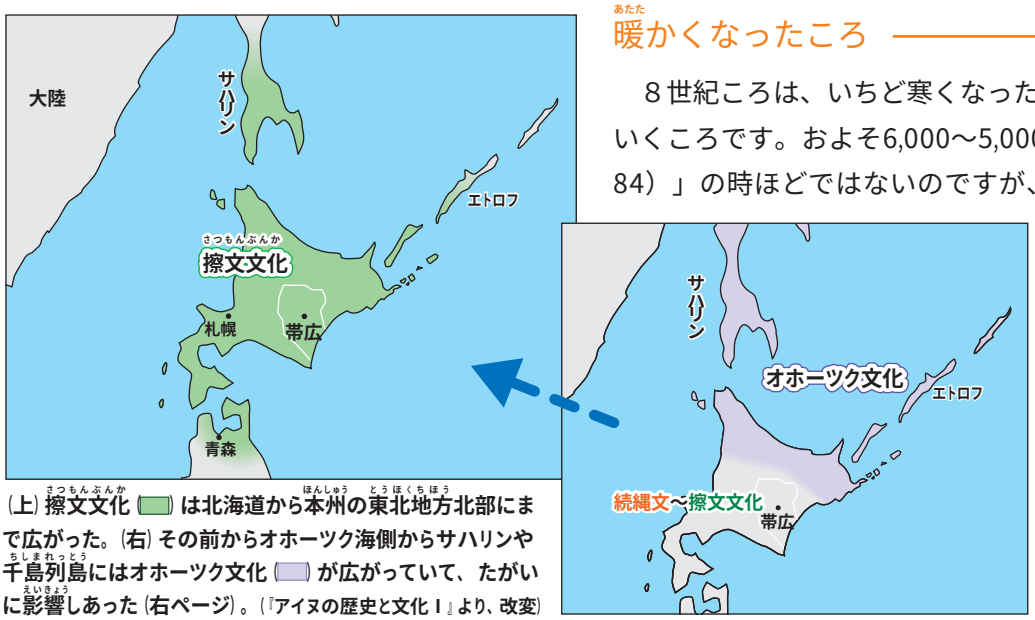
②「さつもん」って何だろう？

擦文土器。すべてではないが、表面をこすったような「擦文」が入った土器がある。　**（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：※2）**

本州中西部で古墳時代に入っても、北海道の人々は、縄文時代と同じ「自然のもので命や生活を成り立たせる文化」を続けます。といっても、変化がないのではありません。南は本州と、北はサハリンや大陸との交流があり、暮らしや文化は少しずつ変わっていきました。

およそ 1,200 年前（7～8 世紀※1ころ）、それまで 1 万年もの間、土器の表面をかざっていた「縄文（縄を転がすなどしてつける文様〔もよう〕）」が、土器から消えました。

かわって、木のへらなどでこすったあとがつけられるようになります。この「擦った文様」を「擦文」といい、この土器を「擦文土器」、この時代を「擦文時代（～ 12、13 世紀）」と呼びます。



（上）擦文文化（　）は北海道から本州の東北地方北部にまで広がった。（右）その前からオホーツク海側からサハリンや千島列島にはオホーツク文化（　）が広がっていて、たがいに影響しあった（右ページ）。（『アイヌの歴史と文化 I』より、改変）

暖かくなったころ

8 世紀ころは、いちど寒くなった気候がまた暖かくなっていくころです。およそ6,000～5,000年前の「縄文海進（→p 84）」の時ほどではないのですが、10世紀の末ころには今より海面が高くなり、少し陸地がせばまったようです。

こうした暖かい気候のもとで、擦文文化は広がっていきます。北海道のほとんど、本州東北地方の北部、サハリン南部にまで広がります。

かまど登場

このころには、川の河口の近くの丘や海ぞいの丘が、暮らしの中心だったようです。一方で、川をさかのぼった中流にも、小さな集落がつくられていました。

浦幌十勝川（かつての十勝川※3下流部）を見下ろす丘の上や池田町の利別川※3下流（かつての十勝川）の近くに、家が建てられていました。縄文時代と同じく、地面をほり下げて床を低くした「竪穴式」ですが、形はすべて四角形です（角は丸い）。（→ 竪穴式住居 p 85）

床のまん中にたき火をする「炉」があるだけではなく、料理で煮炊きをするための「かまど」が壁ぎわに作られていました。（十勝太古川遺跡・池田３遺跡）

池田３遺跡（池田町）で見つかった、かまどのあとがある竪穴式住居あと。けむり出しの道がみぞとなって残っている（円内）。　**（写真：池田町教育委員会蔵）**

※1　8 世紀（8 せいき）：本州中西部では都が奈良の平城京に移され奈良時代になり（710 年～）、さらに、都が京都の平安京に移され、平安時代（794 年～）になるころ。
※2　帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西 23 条南 4 丁目 26　電話　0155 - 41 - 8731　日・月曜日休館
※3　かつての十勝川（かつてのとかちがわ）：十勝川は、昭和 38 年（1963）の工事までは浦幌十勝川を流れ、昭和 12 年（1937）の工事までは池田市街近くを流れていた。（→ p 190・208）

くぼみになって残る家のあと … ホロカヤントー竪穴群

大樹町晩成にあるホロカヤントー沼と太平洋を見下ろす丘の上に、「ホロカヤントー竪穴群」があります。

ここには、擦文時代の竪穴式住居のあとが残っているのですが、まだ完全にうまりきらず、地面がくぼんでいます。そのため、発掘しなくても、測量調査（ポイントごとに位置と地面の高さを測る調査）をすることで、竪穴の位置や数、分布状況がわかります。

このホロカヤントー竪穴群では、オホーツク式土器というサハリンから北海道のオホーツク海沿岸に広がった「オホーツク文化（このページの下項目参照）」の土器が見つかっています。

復元された家もあります。海を見下ろして当時の暮らしを思いうかべてみましょう。

十勝の擦文時代の集落は、河口近くから太平洋ぞいの丘（海岸段丘）の上にあります。内陸の川ぞいにもありますが、どちらかというと小さなものが多いようです。

ホロカヤントー竪穴群（大樹町）にある竪穴式住居あとのくぼみ。

復元された擦文時代の竪穴式住居（ホロカヤントー竪穴群）。

ホロカヤントー竪穴群の位置。
大樹町字晩成2

もう少し細かいこと

オホーツク文化

擦文時代より早い５世紀ころから、サハリン、北海道のオホーツク海側や千島列島に、海獣（トド・アザラシなど）の狩りをおこなって暮らす人々による「オホーツク文化」が広がりました（左ページ図）。ホロカヤントーに住んでいた擦文文化の人たちは、このオホーツク文化と交流があったようで、遺跡からは「オホーツク式土器」が見つかっています。

オホーツク文化は、擦文文化と交流しながら「トビニタイ文化」※4などを作りますが、北海道では９世紀ころになると、擦文文化に吸収されます。※5

10世紀以降の気候変動

温暖だった約６千年前のあとも、気候は寒くなるだけではなく、寒暖をくり返しています。そして、暖かくなるごとに海水の量が増え海水面が高くなるため海岸線が内陸に入りこみ（海進）、寒くなれば海岸線が沖に下がります（海退）。

10世紀末～11世紀は海進(暖)、12世紀～14世紀末は海退(寒)、14世紀末～16世紀末は海進、16世紀末～17世紀は海退、というように気候は変化してきました。

最後の海退期は世界的に寒い時期（小氷期）で、江戸時代に入っていた本州では農作物が不作になることが多く、寛永の大飢饉※6（寛永19～20年〔1642～43〕）が起きました。

糸つむぎがおこなわれる

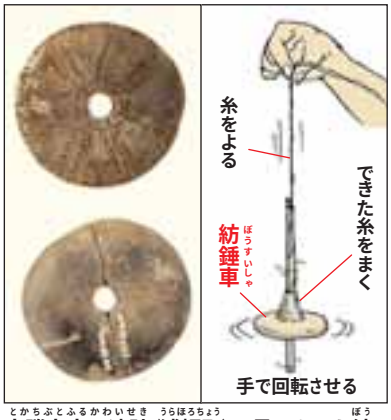
せんいとは、フキのスジやヒツジの毛、カイコのまゆなどのことです。糸はこのせんいを集めて、引きのばしながらねじり、より強く、より長くしたものです。これを糸つむぎといいます。

かつて、この糸つむぎをおこなう時に使われたのが、「紡錘車」です。せんいを紡錘車に差しこんだ棒に結び、紡錘車を回転させてよじりながら、その重さでのばしていくものです。

この紡錘車が、十勝太古川遺跡でたくさん見つかりました。

擦文時代に入り、人々は糸をつむぎ、その糸を使って布を織るようになったのです。

ただ、どんな糸をつむぎ、どんな布を織っていたのかは、見つかっていないためにわかりません。生き物からとったせんいは、多くが土にかえってしまうためです。



十勝太古川遺跡（浦幌町）で見つかった紡錘車。イラストは紡錘車の使い方。
（写真：浦幌町教育委員会蔵）

※４　トビニタイ：羅臼町（らうすちょう）海岸町の地名。飛仁帯とも書き、飛仁帯小学校がある。
※５　オホーツク文化（オホーツクぶんか）：知床（しれとこ）半島では擦文文化の遺跡が見つかっておらず、擦文時代が終わるまでオホーツク文化が生き残っていたという。
※６　飢饉（ききん）：農作物があまりに不作なため、食べ物が少なくなり、人々が飢（う）え苦しむこと。

③ 麦づくりも始まる擦文時代

十勝太若月遺跡（浦幌町）で見つかった、大きな土器にいっぱいの大麦。
（写真：浦幌町立博物館蔵：※2）

十勝に住む擦文文化の人たちは、川や海での漁、野草（山菜）や木の実集め、そして動物の狩りによって食べ物を得ていました。

擦文時代の後期、11世紀以降になると、十勝をはじめとする北海道東北部でも穀物の栽培が始まりました。

浦幌十勝川（かつての十勝川下流）を見下ろす十勝太（浦幌町）の丘の上では、大麦やキビ、それにシソが作られていました。収穫した大麦は、擦文土器の中にたくわえられました。（十勝太若月遺跡：右ページ）

この大麦は寸づまりの形をしていて、もともとは北の大陸から伝わってきたもののようです。

自然の中から食べ物を得ながら、かたわらで農耕もおこなっていたのです。

十勝太古川遺跡（浦幌町）で見つかった鉄器と「ふいご（鉄を熱する時、火に空気を送って高温にする道具）」の「羽口（その空気の通り道）」。
（写真：浦幌町教育委員会蔵）

鉄の道具が使われる

擦文時代になると、鉄の道具が多く使われ、ほとんど石器が使われなくなりました（木や骨・角の道具は使われます）。ついに「石器時代」が終わり「鉄器時代」に入ったのです。

小さな刀、ヤジリ（矢の先）、おの、カマ、針などに鉄のものが利用されます。鉄製品は、本州から持ちこまれました。

十勝太の丘にあった集落のうち、１軒は「かじ屋」でした。よそから持ちこまれた鉄の道具のうち、こわれたものや使いにくいものを、強い火力でとかして新しい道具に作りかえていたのです。（十勝太古川遺跡：浦幌町）

ただ、なべはまだ鉄ではなく、土器が使われ続けます。

アイヌ文化へ

土器からは縄文がすっかり消え、もよう（文様）はヘラで描かれます。その文様を少しずつ変えながら、擦文時代はおおよそ500年くらい続きます。

本州からは鉄製品のほかに、土師器や須恵器と呼ばれる土器もやって来ました。

そして、12〜13世紀ころ[※5]には土器が使われなくなり、アイヌ文化へと変わっていきます。擦文文化の人々の子孫が、アイヌ文化をつくっていったようです(→p111)。

また、アイヌ文化の中で大切な、自然（カムイ[神]→p134）への感謝と願いをこめた祈りの儀式である「クマの霊送り（イオマンテなど）」は、オホーツク文化（→p103）からの影響も受けついでいるようです。

擦文時代前期（9〜11世紀ころ）の文様（南6線遺跡：帯広市）。

擦文時代後期（11〜13世紀ころ）の文様（十勝太若月遺跡：浦幌町）。

（どちらも帯広百年記念館：帯広市緑ヶ丘2　電話：0155-24-5352）

※1　大麦（オオムギ）：麦のひとつ。小麦（コムギ）とちがって、グルテンというものが少なく、ねばり気があまりでない。あらくひいて、かゆにしたり、細かく引いてパンにしたりして食べる。ビールやしょうゆなどの原料になる。

※2　浦幌町立博物館（うらほろちょうりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16 - 1（らぽろ21内）電話 015 - 576 - 2009　月曜日休館

※3　土師器（はじき）：本州で、古墳時代から平安時代にかけて野焼きで作られた土器。

火災現場の検証 … 十勝太若月遺跡

十勝太若月遺跡（浦幌町）には、擦文時代の焼けた家のあと（第16号住居跡）がありました。このころは、何らかの事情で家に住まなくなった時に家を焼くこともあったのですが、この家は火事にあった家でした。

遺跡での「現場検証」の結果、火元はかまどか床の炉で、おりからの南風にあおられ北側の壁に燃え上がり、その後、屋根が焼け落ちたものと推定されました。

人骨はなく、幸い、住人は亡くならなかったようなのですが、ものを運び出す余裕はなかったようです。そのため、当時の暮らしがそのまま残されていました。

床には多数の土器が置かれ、金属器などの生活道具や、炭になった「むしろ」のような編み物、同じく炭になった縄、木器、大麦・シソ・キビのタネが見つかりました。

かまどの前に置かれた大型の土器（カメ）には、脱穀された大麦（炭化）※6がビッシリと入っていました（左ページ）。

住人にとっては不幸なできごとでしたが、この火事のおかげで、当時の生活のようすがくわしくわかりました。

十勝太若月遺跡の第16号住居跡。火災にあったため、当時の生活がそのまま残された。
（写真：浦幌町立博物館蔵）

発掘中の十勝太若月遺跡。丘の上にある。
（写真：浦幌町立博物館蔵）

十勝太若月遺跡の位置。
浦幌町字下浦幌。

もう少し細かいこと

最後の土器 … 内耳土器

擦文文化は、北海道における最後の土器文化です。

一番最後の土器は「内耳土器」と呼ばれるもので、ひもをつけるための２つの「耳」が、器の口の内側につけられています。

天井から下げられたかぎにぶら下げて炉にかける時、ひもが焼けないようにする工夫のようです。実は、この形は「内耳鉄なべ」と呼ばれる鉄なべをまねてつくったものでした。

鉄なべが行きわたる前に、まず形が伝わったのです。

内耳土器はアイヌ文化の初期まで残り、千島方面ではかなりおそくまで残りました。

内耳土器。なべの内側にひもを取りつけるための「耳」がある。右の絵のように、火がひもに直接当たらないようにできる。

擦文時代の集落の場所

ホロカヤントー竪穴群（大樹町）では百数十軒の、また、十勝太若月遺跡（浦幌町）では55軒の擦文住居のあとが見つかっています。ホロカヤントー竪穴群は海岸近くに、十勝太若月遺跡は浦幌十勝川（かつての十勝川）の河口近くにあります。

このように、擦文時代の集落のうち大きなものは、海岸近くや大きな川の河口近くにつくられています。

これは、十勝だけでなく、北海道の擦文文化全体にいえることで、擦文文化の大きな特ちょうの一つです。

本州文化との結びつき

擦文文化は、本州からの影響を大きく受けた文化です。

家の形は、本州の「古墳時代（４～８世紀ころ）」の家のつくりと同じです。

９～10世紀には、本州産の須恵器が北海道各地に伝わっています。さらに11世紀からは、鉄製品が本州から運びこまれるようになります。

サハリンから北回りで入ってきたものや文化もありましたが、本州からの影響の方がはるかに大きなものでした。

こうした本州との交流は、のちのアイヌ文化の成り立ちともかかわっていきます。（→ｐ110・ｐ136）

※４　須恵器（すえき）：斜面に穴をほり、おくにけむり穴を開けた「窖窯（あながま）」で焼いた土器。高温で焼けるのでうすくてじょうぶにでき、陶器（とうき）に近い。
※５　12～13世紀ころ（12～13せいきころ）：平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて。
※６　炭化（たんか）：炭になること。生き物の体などの有機物（炭素化合物）が、酸素の不充分な状態で加熱されること（など）によって、炭素だけになっていくこと。炭化すると分解されず（くさらず）長い間そのまま残る。

参考となる本など

くわしい参考・引用文献 → p254

「帯広市開拓120年記念事業 120年より前の帯広 パンフレット」帯広百年記念館、2002
「十勝二万年史」十勝川流域史研究会、1985
「新 北海道の古代 1 旧石器・縄文文化」野村崇・宇田川洋 編、北海道新聞社、2001
「新 北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化」野村崇・宇田川洋 編、北海道新聞社、2003
「新 北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化」野村崇・宇田川洋 編、北海道新聞社、2004
「アイヌの歴史と文化 I」榎森進 編、創童社、2003
「日本歴史地名大系 1 北海道の地名」平凡社、2003
「十勝川の川舟文化史 澪標」十勝川川舟文化史「澪標」編集委員会、十勝川川舟文化史「澪標」刊行会、2004
「十勝大百科事典」十勝大百科事典刊行会 編、北海道新聞社、1993
「帯広市史（平成15年編）」帯広市史編纂委員会、帯広市、2003　など市町村史・郷土史
「雪花の刻音」八広地域開拓百年記念事業、2005
「モンゴロイドの地球 3 日本人のなりたち」百々幸雄 編、東京大学出版会、1995
「まんがでたどる NHK日本人はるかな旅」馬場悠男・木村英明・小田静夫 監修、NHKスペシャル『日本人』プロジェクト 編、笠原秀 シナリオ、七瀬カイ・安土じょう・さかいひろこ 作画、日本放送出版協会、2001
「十勝の自然を歩く（改訂版）」十勝の自然史研究会、北海道大学図書刊行会、2000
「気候と文明の盛衰」安田喜憲、朝倉書店、1990
「山渓カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と渓谷社、1995

参考となるインターネット・ページ

くわしい参考・引用ページ → p255

はじめに「Stone knife のページ」http://www14.plala.or.jp/stoneknife/index.html
「小川雅弘 Web Site」http://ogawa-wakuwaku.net/taiken/index.htm
細石刃　「日本人はるかな旅展のページ」
http://www.kahaku.go.jp/special/past/japanese/ipix/2/2-15.html
http://www.kahaku.go.jp/special/past/japanese/ipix/2/2-09.html
「特別史跡　三内丸山遺跡・重要文化財写真集のページ」
http://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/photo/index.html
「古代吉備を探る II 連載第２回　石は物語る のページ」
http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/saguru2-2.htm
自　然　「大昔、北海道に象がいたのページ」
http://www.hmh.pref.hokkaido.jp/jishin-tsunami-soeda/naumanzou.htm
土器づくり「燃える男の土器の作り方のページ」
http://homepage2.nifty.com/sonodaworld/makesearthenvessel1.htm
「西積丹縄文ワールドのページ」http://www.hepco.co.jp/jomon/jomon/bunka/index.html
「本物志向の縄文土器をつくろう」
http://www.ishikawa-maibun.or.jp/taiken/jomondoki/jomondoki_taiken.htm
川　漁　「紅葉山49号遺跡／2002のページ」
http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/kakubu/kyouiku/49iseki/index_m49.htm
麦づくり「土岐市美濃焼伝統産業会館のページ」http://www.minoyaki.gr.jp/minoyaki2/densan/anagama.html

絶版・サイト閉鎖などでご覧になることができない場合があります